

広島市の文化財 第29集

広島市安佐南区安古市町所在

中畦遺跡発掘調査報告

1984. 3

広島市教育委員会

は し が き

広島市安佐南区内を沼田町から安古市町へ流れる安川は、太田川の支流の一つです。この流域は、古くから交通路や農耕地として発展していました。

近年、安川周辺の低丘陵地帯は宅地開発がさかんに行われ、町の様子も大きく変わっています。これまで、古い時代のこの地域の様子はあまり知られていませんでしたが、最近、いくつかの埋蔵文化財に関する調査が行われ、少しずつ明らかになってきております。

この度、安佐第三中学校（仮称）の建設に伴い、用地内にある遺跡について記録保存するために、広島市教育委員会が発掘調査を行いました。その結果、広島市内の他の遺跡と比べて、かなり標高の高いところから住居跡がみつき、またガラス製の勾玉が発見されるなど、貴重な資料を得ることができました。

本調査にあたり、ご指導、ご援助いただきました多くの方々、発掘調査に従事していただいた方々、並びに整理作業に従事していただいた方々に厚くお礼申し上げます。この報告書が歴史研究や郷土理解のために役立てば幸いです。

昭和 59 年 3 月

広島市教育長 藤 井 尚

例 言

1. 本書は、安佐第三中学校（仮称）建設に伴い、昭和 57 年 10 月 4 日から 12 月 24 日までの間実施した中畦(なかあぜ)遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、広島市教育委員会事務局施設部用地課から依頼を受けて、同社会教育部社会教育課が実施した。
3. 本書の執筆は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳを幸田淳、Ⅲ・Ⅴを中村眞哉が担当した。
4. 本書掲載の巻頭図版及び航空写真は、はにわ会会員井手三千男氏から提供を受けた。
5. 第 1 図は、建設省国土地理院発行の 25,000 分の 1、祇園の地形図を複製したものである。

目 次

I	はじめに	1
II	位置と環境	2
III	遺 構	5
IV	遺 物	14
	中畦遺跡出土土器観察表	16
V	ま と め	35

図 版 目 次

巻頭図版	ガラス勾玉（第1号住居跡出土）
図版 1	中畦遺跡全景（航空写真）
図版 2	a 第1号住居跡（南から） b 第2号住居跡（西から）
図版 3	a 第1号土壇 b 第2号土壇
図版 4	a 第3号土壇 b 第4号土壇及び平坦面（北東から）
図版 5	a 第5号土壇 b 第6号土壇
図版 6	a 第7号，第8号，第9号土壇 （西から） b 第10号土壇
図版 7	a 最高所直下土器出土状況 （5区N南側部分・西から） b 最高所直下土器出土状況 （6区E－北から）
図版 8	中畦遺跡出土遺物(1)
図版 9	中畦遺跡出土遺物(2)
図版 10	中畦遺跡出土遺物(3)
図版 11	中畦遺跡出土遺物(4)

挿 図 目 次

第1図	中畦遺跡の位置及び周辺の遺跡	2
第2図	中畦遺跡周辺地形図	4
第3図	中畦遺跡遺構配置図	5
第4図	第1号住居跡実測図	6
第5図	第2号住居跡実測図	8
第6図	第1号土壇実測図	9
第7図	第2号土壇実測図	10
第8図	第3号土壇実測図	11
第9図	第4号土壇実測図	11
第10図	第5号土壇実測図	11
第11図	第6号土壇実測図	12
第12図	第7号，第8号土壇実測図	12
第13図	第9号土壇実測図	i 3
第14図	第10号土壇実測図	13
第15図	鉄器実測図	14
第16図	ガラス勾玉実測図	14
第17図	石斧実測図	15
第18図	中畦遺跡出土土器実測図(1)	29
第19図	中畦遺跡出土土器実測図(2)	30
第20図	中畦遺跡出土土器実測図(3)	31
第21図	中畦遺跡出土土器実測図(4)	32
第22図	中畦遺跡出土土器実測図(5)	33
第23図	中畦遺跡出土土器実測図(6)	34

I は じ め に

昭和56年11月広島市教育委員会は、安佐第三中学校（仮称）を安佐南区安古市町高取に建設することを決めた。これ以前に遺跡の取り扱いについて、学校建設担当課と文化財保護担当課である当課との間で数度の協議を重ねた。その結果地形的条件から発掘調査を実施することは止む得ないと結論を出すに至った。このため、昭和57年10月から同年12月の3ヵ月間にわたって発掘調査を行った。

発掘調査関係者は次のとおりである。

調査依頼課	広島市教育委員会施設部用地課
調査担当課	広島市教育委員会社会教育部社会教育課文化財係
調査関係者	森脇昭之（社会教育部長） 川崎良馬（前社会教育課長） 上川孝明（社会教育課長） 佐藤普門（ 〃 課主監） 木原 亮（ 〃 課長補佐文化財係長）
調 査 者	幸田 淳（ 〃 文化財係） 中村眞哉（ 〃 〃 ）

調査補助員

中本十一，中村隆夫，中村久子，河内コイマ，松栄由貴子，加藤百合子，安田源三，上土井フシミ，森脇孝人，森脇フジエ，平岡綾子，井原博，土本富市，上山光好，三浦笑造河本義一，富田三枝子，楽本智美，山本克己，笠岡弘子，笠岡博，住川努，井手下強史，瀬垣正義，住川香代子，藤本政一，河合淳子，

また，可部郷土史研究会三野丈一氏，はにわ会井手三千男氏，安古市郷土史研究会村岡幸雄氏，広島大学文学部考古学研究室の方々には数多くのご教示を頂いた。さらに，調査を円滑に進めるに当って，施設部用地課，施設課，地元在住の方々，安北小学校長丸岡英治氏，安古市公民館長山本隆信氏等を初めとする各機関の職員の方々には多大なご配慮を頂いた。ここに記して謝意を表したい。

Ⅱ 位置と環境

本遺跡は、広島市安佐南区安古市町大字高取字中畦に所在する。本遺跡の位置する丘陵は、標高631.3 mの荒谷山から南へ延びる尾根のうちの一つであり、遺跡の標高は164 m前後、南方の安川の後背地からの比高は約140 mである。本遺跡が南面する安川は、西から東へ流れ、広島市を南北に貫流する太田川に注ぐ。また安川には多くの狭小な河川が注ぎ、この小河川によって安川流域の兩岸には多くの小河谷が形成されている。本遺跡はこの小河谷の縁辺の尾根上に位置しており、安川流域の他の遺跡も同様の立地を示している。

さて、安川流域の遺跡を概観してみよう。まず、この流域で現在まで最も古いものとされているのは、沼田町伴に所在する細坂遺跡である。この遺跡は、大型蛤刃石斧の単独出土地であり、弥生



- 1.中畦遺跡, 2.巢取遺跡, 3.恵木遺跡, 4.鶏頭原貝塚, 5.相田A遺跡, 6.相田B遺跡
7.相田C遺跡, 8.毘沙門台遺跡, 9.大町矢カ谷遺跡, 10.広島経済大学構内遺跡群, 11.国重遺跡

第1図 中畦遺跡の位置及び周辺の遺跡

(注1)

(注2)

時代中期のものと考えられている。弥生時代後期のものと推定される遺跡としては、巢取遺跡、毘沙門台遺跡第1・2地点、恵木遺跡、大町矢力谷遺跡などがあげられる。(第1図参) このうち巢取遺跡を除く遺跡については既に発掘調査が行われている。

毘沙門台遺跡第1地点は、権現山(397 m)から南に延びる比高150 m程度の尾根上に位置する。この第1地点遺跡は、集落及び箱式石棺・土器棺・土壙等からなる遺跡である。このうち竪穴式住居跡は約70軒分、貯蔵穴と考えられる土壙は約180基を数え、広島市域でも最大級の集落跡と考えられる。^(注3) また第2地点遺跡は、住居跡10軒余りが検出されており、距離的に近接する第1地点と関係の深い遺跡といえよう。

次に恵木遺跡は、昭和56年に発掘調査が行われた遺跡であり、中畦遺跡とは安川をはさんで対岸に位置している。この遺跡は、武田山から北方へ延びる尾根裾部の標高70 mの独立丘陵上に位置し^(注4) ており、住居跡2軒と箱式石棺、土壙を中心とする墳墓群が検出された。

大町矢力谷遺跡は、安川流域というよりも太田川の西岸に当るものであるが、古代における安川の流路から考えて、安川水系に入れられるものと考えられる。この遺跡は、武田山から南東に延びる尾根裾部の標高100 m前後を測る丘陵上に位置しており、内容的には恵木遺跡同様住居跡と墳墓群^(注5) が検出されている。

これらの遺跡から若干時代の下る遺跡としては、沼田町伴に所在する国重遺跡^(注6) がある。国重遺跡からは住居跡2軒が検出され、弥生時代終末ないし古墳時代初頭のものと考えられている。この遺跡は標高70 m程度の丘陵先端部に位置しており、恵木遺跡と同様の立地を示す。

以上のように、安川流域における遺跡の分布は、現在まで調査の進んでいる太田川東岸の地域とほぼ同様の性格を示している。しかし、太田川東岸地域と比較して安川流域の集落立地が比高の高い地域にまで及んでいるという点でその特異性がある。太田川東岸地域では現在まで集落跡が確認されているのは、比高100 m程度の尾根上であるが、本遺跡及び毘沙門台遺跡はともに比高150 m程度と高く、さらに毘沙門台遺跡のように数十軒の集落を営んでいる点は注目に値するものであろう。

なお、最後になるが、太田川東岸の集落遺跡のうち、東区戸坂町、牛田町にまたがる西山貝塚は標高約250 mを測る高所に立地しており高地性集落と考えられている。この西山貝塚からは、^(注7) 銅器を初め、鉄鏃、扁平片刃鉄斧などの儀器、利器類が多く出土している。

(注1) 広島市「沼田町史」昭和55年

(注2) 分布調査により所在を確認した。

(注3) 毘沙門台遺跡発掘調査団「現地説明会資料」昭和57年12月

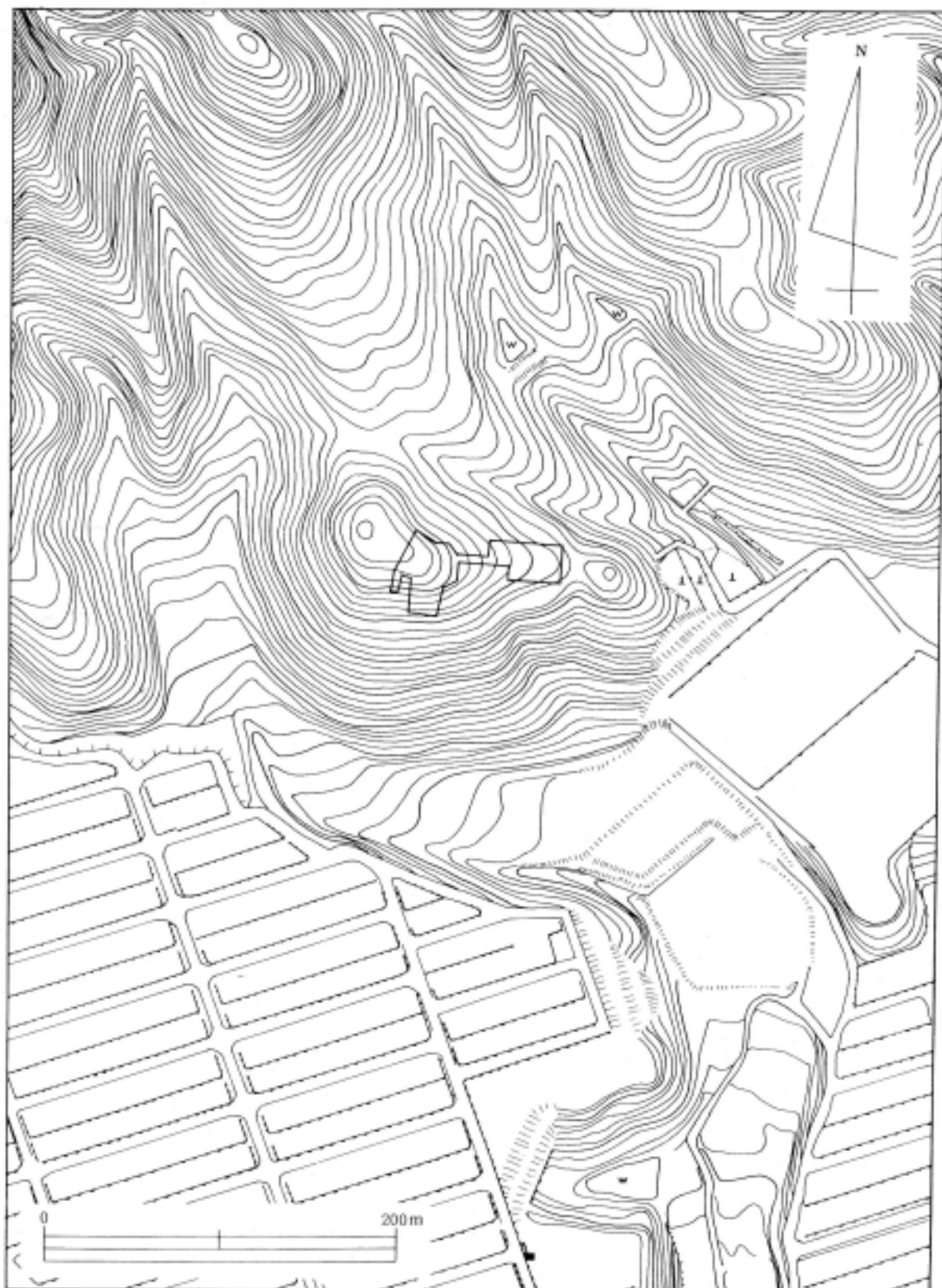
(注4) 恵木遺跡発掘調査団「恵木遺跡発掘調査報告」1982年

(注5) 大町矢力谷遺跡発掘調査団により調査済み。昭和55年

(注6) 広島市教育委員会「国重城跡発掘調査報告」1982年

(注7) 広島市「新修広島市史」昭和36年

川越哲志「弥生時代鉄製工具の研究(1)―板状鉄斧について―」『広島大学文学部紀要』第33号昭和49年
広島県「広島県史―考古編―」昭和54年

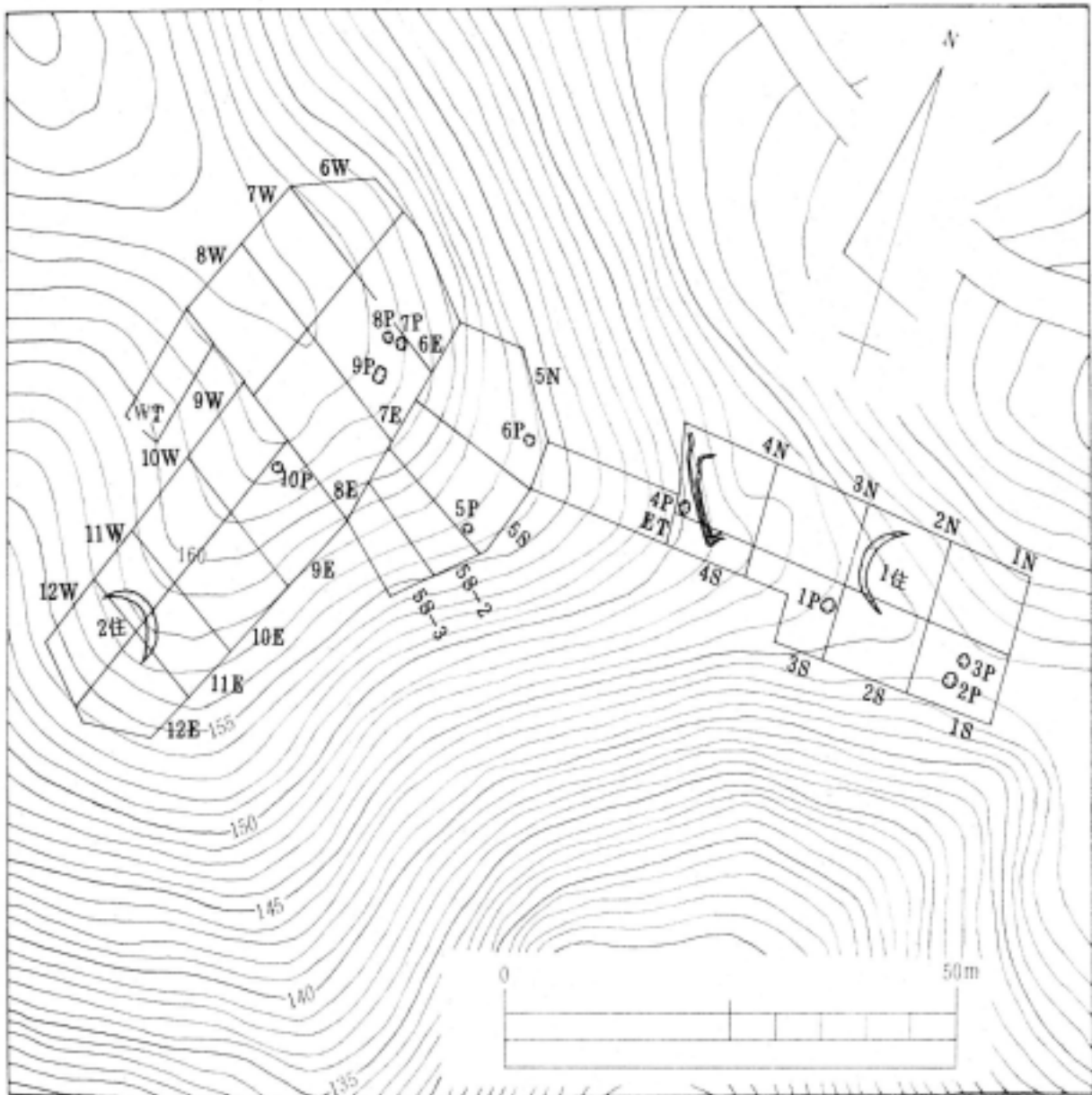


第2図 中哇遺跡周辺地形図

Ⅲ 遺 構

本遺跡は、荒谷山（標高 631.3 m）から南へ延びる尾根の一つに位置している。この尾根は、標高 168.1 m の地点で若干の平坦面をもち、さらに、東へ向かって延びており、遺跡はこの付近にある。背後にあたる北側では自然地形とはいえ尾根が切断されたように落ち込んでいる。また、この尾根は遺跡の東方で比較的平坦になっているが、この地点からは住居跡などの遺構は検出されていない。なお、地形からみると、この尾根はさらに南へ延びていたものと考えられるが、開発による地形変更のため、往時の状況は明瞭ではない。

本遺跡からは、竪穴式住居跡 2 基、土壇 10 基を検出した。なお、遺構の呼称は検出の順次による。



第3図 中畦遺跡遺構配置図



L = 146.5m (アミ目は焼土)



第4図 第1号住居跡実測図

第1号竪穴式住居跡（第4図）

第1号住居跡は、本遺跡の最高所から東へ延びる尾根の鞍部に近い傾斜面に位置している。この住居跡の平面プランは円型を呈し、直径約8 mを測る。壁高は、西側で最高72 cmを測るが、その立地の関係上、壁は西半分しか確認できなかった。

住居跡の西半分から壁溝が検出され、その一部が二重となっていることから、住居の建て替えのあった可能性がある。壁溝の規模は、幅20～30 cm、深さ10 cm程度である。また、壁溝内からは、径10～15 cm、深さ20～30 cmの円形の凹みが4か所検出されている。

柱穴と考えられるピットは11個あり（P 1～P 11）、径30～50 cm、深さ45～80 cmを測る。これらの柱穴の壁からの距離は、概ね1.5～2.0 mを測るが、P 11は約3 m、P 9は推定で1 m弱である。また、P 10は、その断面の形状から、柱が直立し得ないと考えられることから、この3本は副柱として用いられた可能性が強い。

主柱と考えられる8本（P 1～P 8）のうち、P 3、P 8は近接しているため、ともに、主柱として並存していたとは考えられない。この2本については、壁との距離から、P 3の方がやや適しているとみられるがP 8も建て替え時に使用された可能性も残る。しかしいずれにしても、この住居は、基本的には7本柱によって上屋施設を構築していたものと考えられる。

なお、本住居は建て替えの可能性があるが柱穴の位置関係からみて、概ね同一の柱穴を使用したことが推定される。

住居跡内の北西側から、焼土及び炭化物がまとまって出土しており、炭化物は、住居の上屋施設の木材が焼け落ちたものと考えられる。また、二重の壁溝のうち、内側の壁溝内から、壁に立てかけた板材が焼けたものと考えられる炭化物が検出された。このことから壁溝は、内側のものが外側よりも新しいと考えられる。

この住居跡内のうち、P 4付近の床面上からはガラス勾玉1点（第16図）P 2付近からは鉄器1点（第15図）が出土し、その他に少量の土器片が出土している。

また、第1号住居跡の西約22 mの地点に、尾根と直交する方向に、地山を削平して設けられた長さ約13 m、幅3～6 mほどの平坦面がある。この平坦面の西端から幅40～100 cm深さ5 cm弱の浅い凹みがコの字状に検出されている。その規模は尾根を横断する方向に約10 m、尾根の方向には南側は約2 m、北側は約3 mを測る。

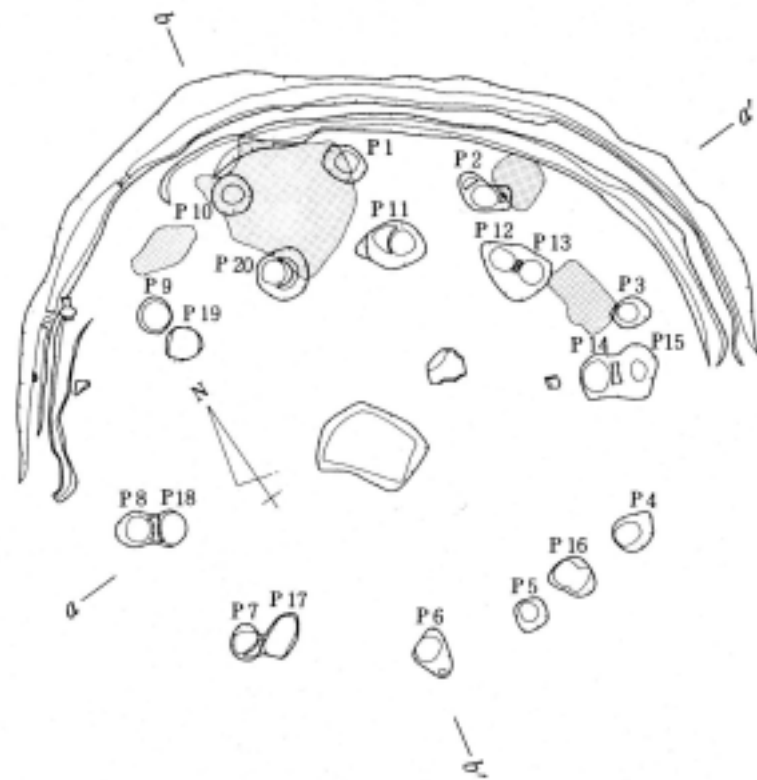
この平坦面は、その位置関係から、第1号住居跡と関連するものと推定されるが、これに伴う遺物が出土していないこともあって、この平坦面の性格は明らかでない。

第2号竪穴式住居跡（第5図）

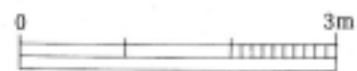
第2号住居跡は、本遺跡の最高所から南へ向かう傾斜面に位置している。この住居跡は円形に近いプランを呈し、直径約7.5 mを測る。壁高は、北側で最高75 cmを測るが、その立地の関係上、壁は北半分しか確認できなかった。

住居跡の北半分から、壁溝が二重に検出されており、その規模は、幅20～30 cm、深さ5～10 cmである。外側の壁溝内から径15 cm前後、深さ約10 cmの円形の凹みが2か所検出されている。

また、柱穴と考えられるピットが20個検出されており（P 1～P 20）、これらは径30～40 cm、深さ30～70 cmを測る。これらの柱穴は、その位置関係（第5図）から、二重に設けられたものと考えられ、とくに北側においては、外側の柱穴と内側の柱穴が明瞭に対となっている。このことから、第2号住居は、建て替えがあったものと考えられる。



L = 157.0m (アミ目は焼土)



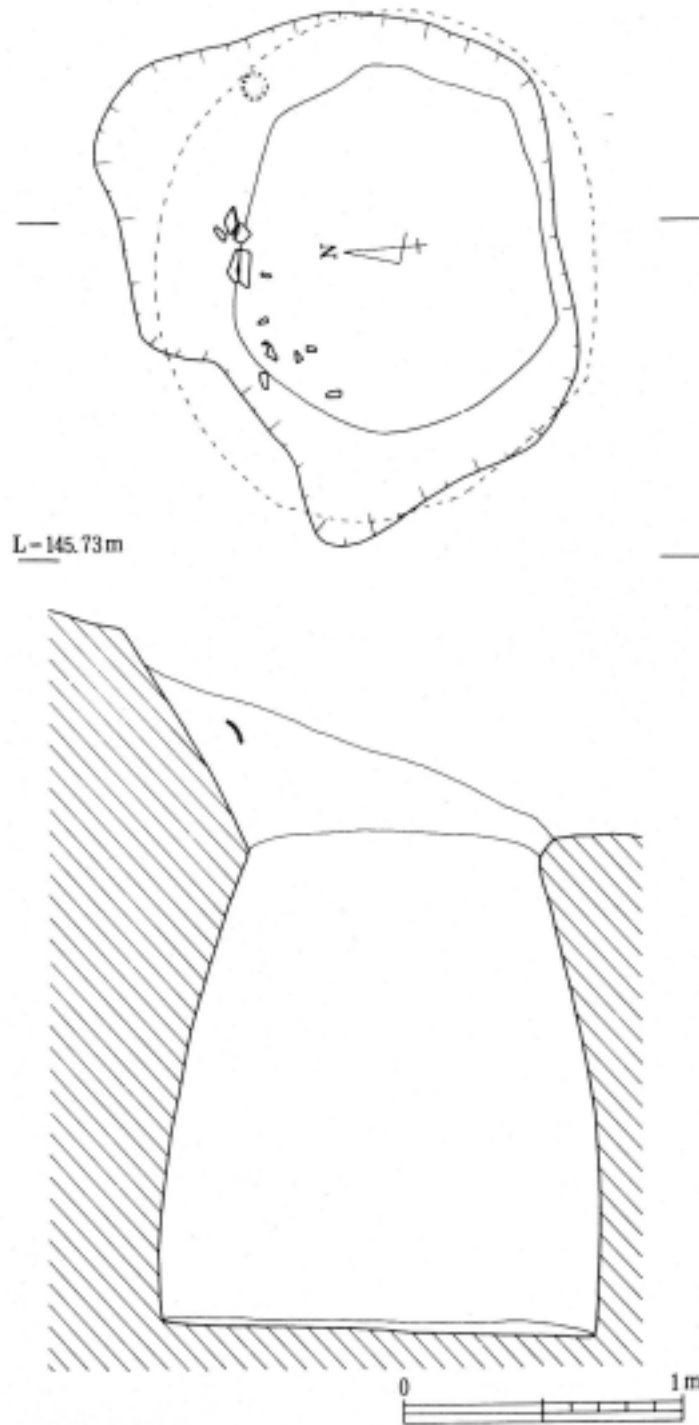
第5図 第2号住居跡実測図

第2号住居の上屋施設を構築した柱穴を，外側のもの（Aグループ）と内側のもの（Bグループ）に分類すると次のように考えられる。

A P 1～P10

B P 11, P 13, P 14, P 16, P 17～P 20

Aグループは，柱穴間の距離 100～210 cmを測る 10本柱のものであり，壁からの距離は，壁の現存している北側についてみると，80～120 cmを測る。Bグループは，柱穴間の距離 110～190 cmを



第6図 第1号土壙実測図

測る9本柱のものであり、壁からの距離は北側で140～170cmを測る。もっともP6は、柱穴間の距離からみて、A、Bともに用いられたことが推定される。

さらに、P12とP15は、それぞれP13、P3と隣接しており、ともに主柱として使用されたと考えられない。そこで隣接するP11及びP14、P2及びP4との位置関係からみてP13及びP3を主柱穴として使用したと考える方が妥当であろう。以上のことから判断して、外側の壁溝はAグループの柱穴と対応し、内側のそれはBグループと対応すると考えられる。

次に、建て替えの前後関係について考えてみると、住居跡の北側から検出された焼土は、P10、P1の埋土の上まで広がっている。この焼土の検出状況からP10、P1は焼土の形成以前に使用されたものと考えられる。このことから、P10、P1を含むAグループは、Bグループよりも先行する可能性が強いと考えられよう。

床面のほぼ中央に、100×70cm、深さ約20cmの浅い土壌がある。この土壌内から遺物は検出されなかったが、その位置からみて炉跡の可能性はある。

遺物としては住居跡内の内側の壁溝上から完形の脚付長頸壺(No.50)が出土し、その他に土器片(No.33, 47, 69)が出土している。また住居跡の埋土中から石斧(第17図)が1点出土している。

第1号土壌(第6図)

第1号土壌は、第1号住居跡の西約6.5mの地点にある袋状土壌である。上縁部は不整形で径145～188cm、底部はほぼ円形で径160cm前後を測る。

深さは163～227cmを測り、底面は平坦である。

なお、土壌の埋土中から土器片(No.49)が検出されている。

第2号土壌(第7図)

第2号土壌は、第1号住居跡の東約10mの地点にあり、断面の形態はわずかに袋状を示す。上縁径122～135cm、底径112～118cmを測り、上縁部、底部ともほぼ円形のプランを呈している。深さは57～116cmを測り、底面は平坦である。

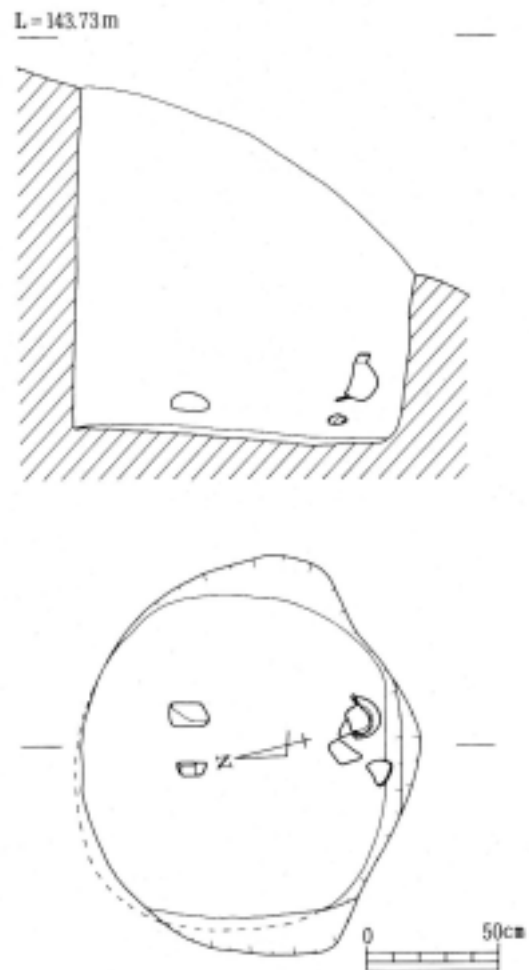
土壌内からは土器(No.15)と10～15cm大の河原石2個が検出されている。

この土壌は、位置、形態、出土遺物から、貯蔵穴として用いられたものと考えられる。

第3号土壌(第8図)

第3号土壌は、第2号土壌の北に近接する地点にあり、断面の形態は袋状を示す。上縁径105～125cm、底径110～115cmを測り、上縁部、底部とも円形に近いプランを呈している。深さは13～59cmと浅く、底面は平坦である。

なお、土壌に伴う遺物は検出されなかった。



第7図 第2号土壌実測図

第4号土壙（第9図）

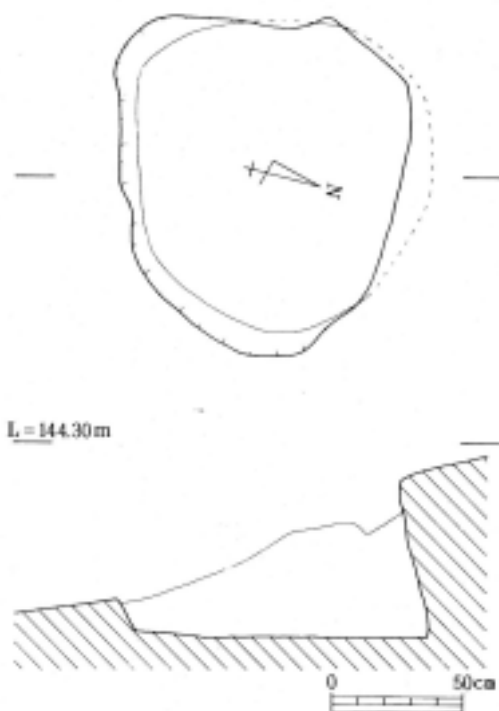
第4号土壙は、第1号住居跡の西約23mの傾斜面にあり、断面の形態は袋状を示す。上縁部はほぼ円形で径133～158cm、底部は円形で径140cmを測る。深さは45～108cmを測り、底面は平坦である。

なお、土壙の埋土中から土器の小片が検出されている。

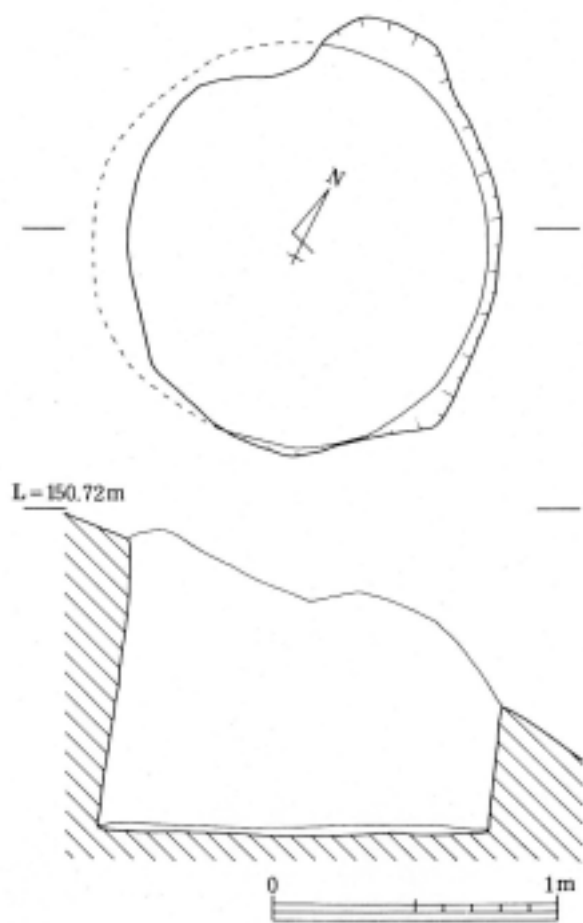
第5号土壙（第10図）

第5号土壙は、第6号土壙とともに、本遺跡の最高所にある平坦部分より一段低い地点から検出された。上縁部は、不整形で径125～138cm、底部はほぼ円形で径約62cmを測り、底面は平坦である。深さは40～115cmを測る。

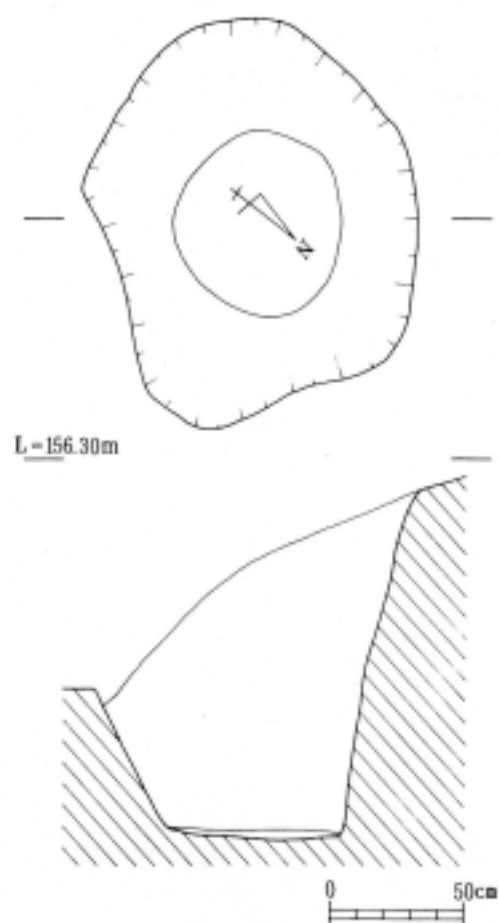
なお、土壙に伴う遺物は検出されなかった。



第8図 第3号土壙実測図



第9図 第4号土壙実測図



第10図 第5号土壙実測図

第6号土壙（第11図）

第6号土壙は、第5号土壙の北約11mの地点にあり、形態は袋状を示す。上縁径115～125cm、底径約130cmを測り、上縁部、底部ともほぼ円形のプランを呈している。深さは18～92cmを測り、底面は平坦である。

なお、土壙に伴う遺物は検出されなかった。

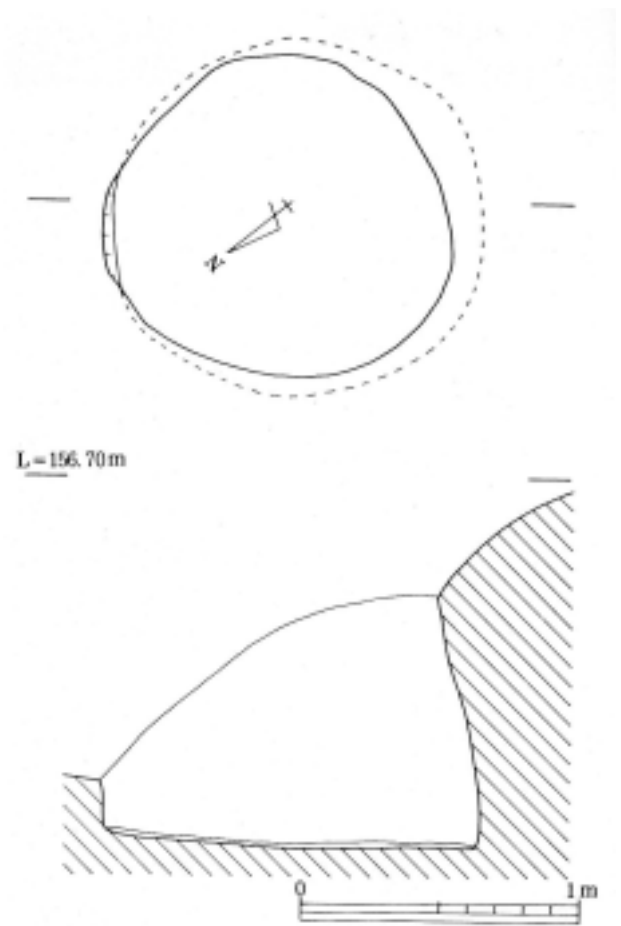
第7号土壙（第12図）

第7号土壙は、本遺跡の最高所にある平坦部分から検出された4基の土壙（第7号～第10号土壙）の一つである。上縁径107～115cm底径100cm前後を測り、上縁部、底部ともほぼ円形のプランを呈している。深さは25～42cmを測り、底面は平坦である。

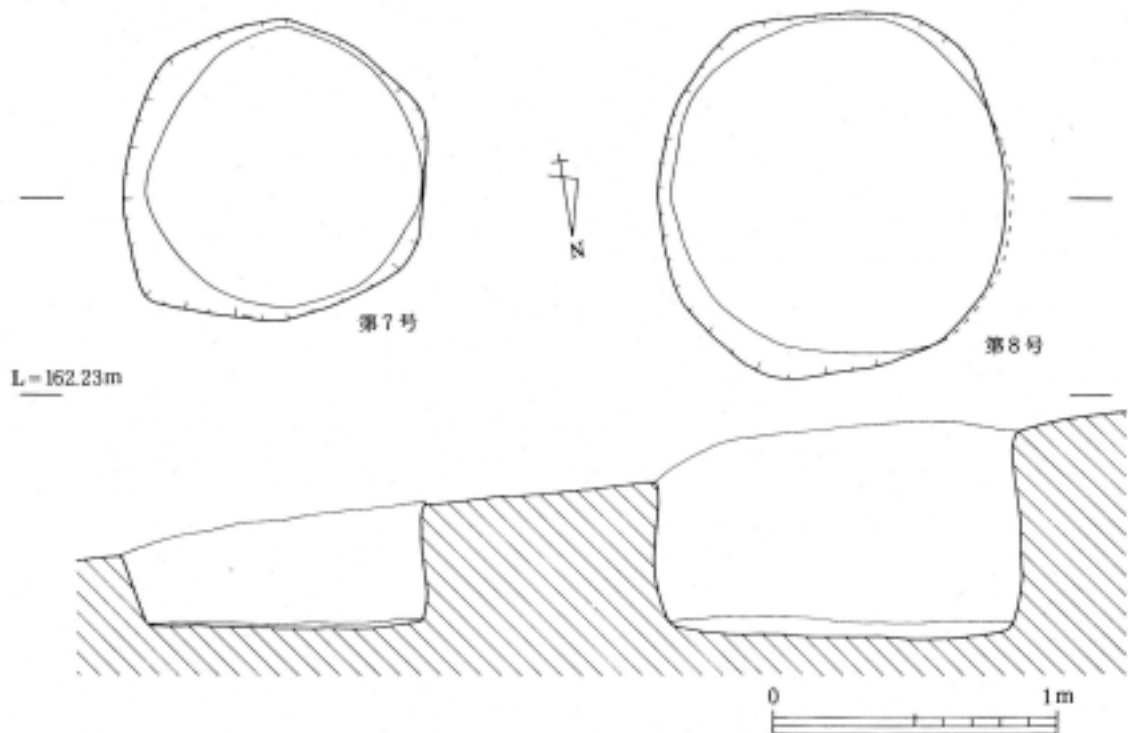
なお、土壙に伴う遺物は検出されなかった。

第8号土壙（第13図）

第8号土壙は、第7号土壙の西に近接する地点にある。上縁径123～138cm、底径約120cmを測り、上縁部、底部ともほぼ円形のプランを呈している。深さは50～73cmを測り、底面は平坦である。



第11図 第6号土壙実測図



第12図 第7号、第8号土壙実測図

なお、土墳に伴う遺物は検出されなかった。

第9号土墳（第13図）

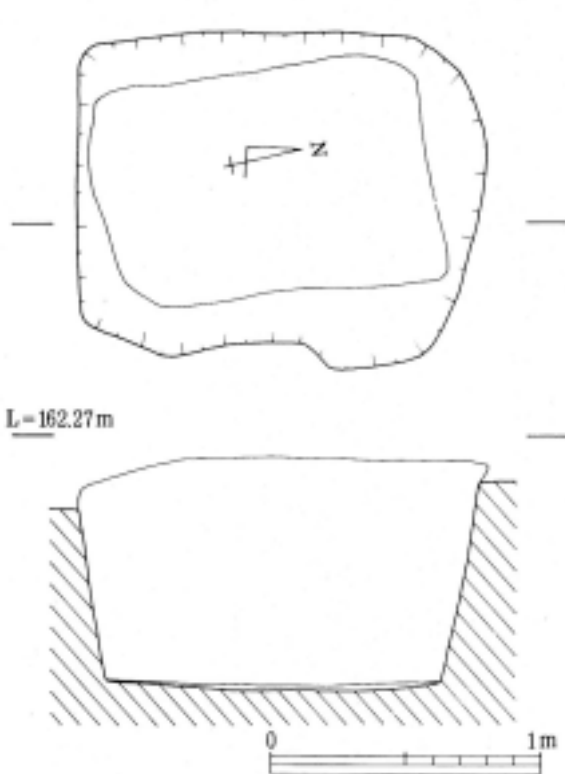
第9号土墳は、第8号土墳の南に近接する地点にあり、長軸を南北にとり、ほぼ長方形のプランを呈している。規模は、上縁部で長さ150cm前後、幅102～110cm、底部で長さ125cm前後、幅75cm前後を測る。深さは57～74cmを測り、底面は平坦である。

本遺跡から検出された10基の土墳のうち、長方形のプランをもつものは、この土墳のみである。この土墳の性格は、遺物が検出されていないため明瞭ではないが、埋葬施設の可能性もあろう。

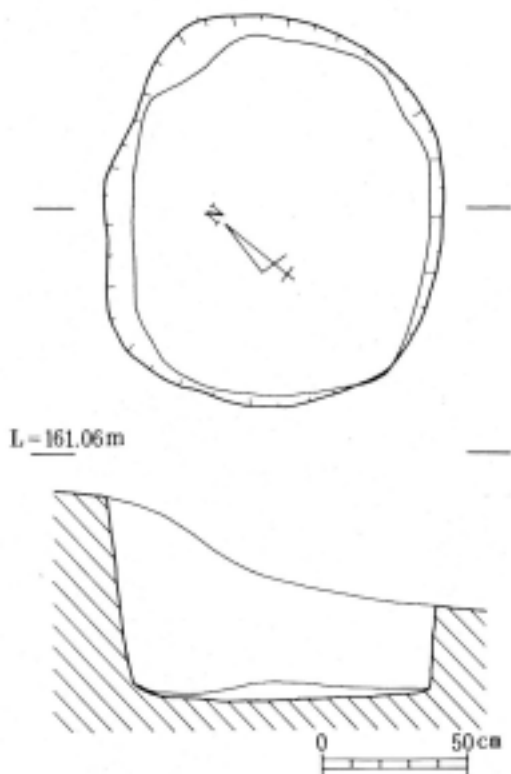
第10号土墳（第14図）

第10号土墳は、第2号住居跡の北東約23mの地点にある。上縁径116～127cm、底径102～117cmを測り、上縁部、底部ともほぼ円形のプランを呈している。深さは28～65cmを測り、底面は平坦である。

なお、土墳に伴う遺物は検出されなかった。



第13図 第9号土墳実測図



第14図 第10号土墳実測図

IV 遺 物

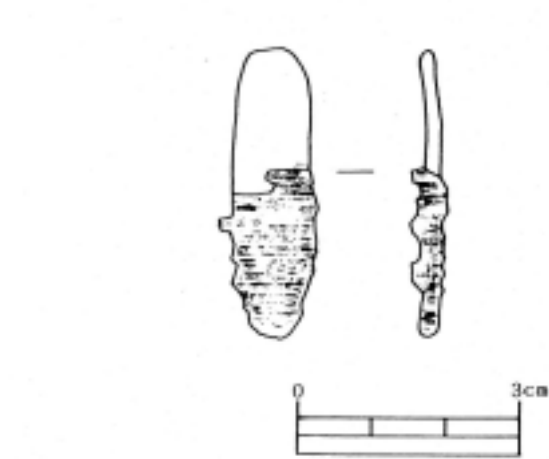
本遺跡からは鉄器、ガラス勾玉、石斧、弥生土器が出土した。鉄器及びガラス勾玉は第1号住居からの出土であり、石斧は第2号住居埋土内からの出土である。弥生土器は図示し得るもの69点であり、このうち遺構に伴うものは5点であった。他のほとんどの土器は5区Nを中心に本遺跡最高所からの流れ込みの状態で出土した。また各器種の出土土器全体に対する割合は甕65%、壺14%、坏7%、鉢4%、その他10%という値を示しており、特に壺の半数が長頸壺という点は注目できる。さらにほとんどの土器は、焼成ないし胎土が不良であり、器形からみても、日常雑器として使用されたものであろう。しかし、No.49,51,53,64等はその中でもやや特徴的であった。No.64は手づくね土器であり、第1号住居外南側から流れ込みの状態で出土したものである。他はいずれも精製の土器であり、No.51,53は長頸壺No.49は複合口縁を呈する大型の壺である。以上出土遺物の概要を述べたが、土器については観察表として後掲する。

鉄器（第15図）

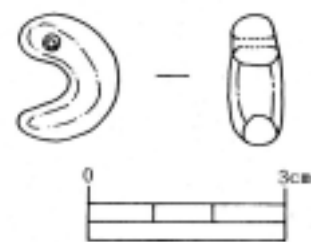
これは第11住居内北よりのP2付近から出土したものである。現存する長さは4.7cm、幅1cmを測り、形態的には鉋と考えられる。刃部と考えられる部分には鍵はみられず裏すきと思われる若干の凹みがみられるが、断面形はほぼ扁平を呈する。茎部には木質が残存しているが、この本質は表裏とも軸線に対して直角方向の木目を顕著に残しており、着柄法に特徴をもつ。

ガラス勾玉（第16図）

ガラス勾玉は第1号住居内東よりのP4付近から出土したものである。勾玉は長さ2cm、幅1.5cmと小形の定形式である。材質は青緑色を呈するガラスである。穿孔は片側から行われており、表面は風化が進み、気泡が多くみられる。



第15図 鉄器実測図

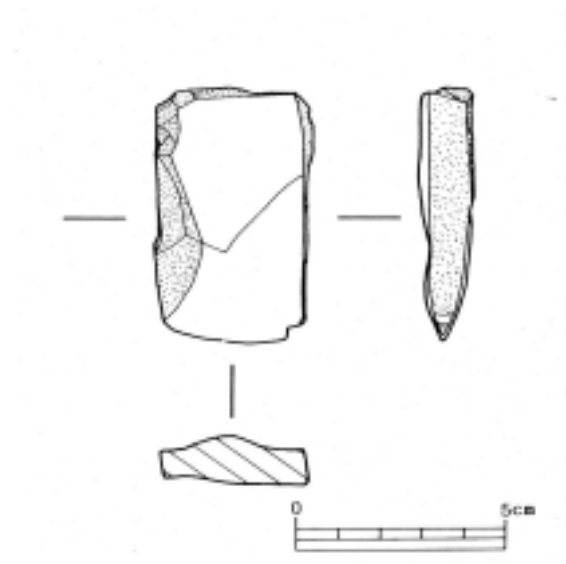


第16図 ガラス勾玉実測図

石斧（第 17 図）

石斧は第 2 号住居の埋土から出土したものである。長さは 7.2 cm，刃部幅 3.4 cm，厚さ 1.2 cm 程度を測るが，刃部の一部は欠損している。

石斧は軟質のものであり，製作の技法も粗雑であり，多くの自然面を残している。しかし，刃部は研磨されていることから石斧とした。使用痕はなく，材質形態から考えて実用品とは考え難い。



第 17 図 石斧実測図

中 畦 遺 跡 出 土 土 器 観 察 表

器種	番号	出土地点	法量 (cm)	形態について	成形・調整について	備 考
甕	1	4 区 S	口径 15.2	口唇部は上下に肥厚し口縁部には一条の凹線をもつ。	内外面ともヨコナデ。	色 : 赤褐色 胎土 : 大粒の砂粒を含む 焼成 : 不良 外面口縁下にスス付着
	2	5 区 S	口径 17.6 胴部最大径 18.4	口唇部はわずかに肥厚し、口縁端部には二条の凹線をもつ。口縁部は「く」字状に外反している。胴部最大径は口縁直下にあり、鋭角的な稜線をもつ。	内面頸部下はヨコ方向のヘラ削りを施し、口縁部内面及び外面はヨコナデ。肩部には5～6本の櫛歯状工具による押し引きの施文がある。	色 : 赤褐色 胎土 : 砂粒を多く含む 焼成 : 不良
	3	4 区 N	口径 15.6 胴部最大径 17.1	口唇部は上方に向けて肥厚し、口縁端部には二条の凹線をもつ。口縁部が「く」字状に外反している。胴部は鋭角的な稜線をもつ。	内面頸部下はヘラ削りの後ナデを行なっている。口縁部内面及び外面はヨコナデ。なお、胴部の稜線下はヨコ方向のハケ目後ナデ。肩部には上下2段にわたって櫛歯状工具による押し引きが施されている。	色 : 赤褐色 胎土 : 砂粒を多く含む 焼成 : 良好
	4	3 区 N	口径 16	口唇部は上下に肥厚し、口縁端部には二条の凹線をもつ。口縁部は「く」字状に外反している。	内面頸部下はヨコ方向のヘラ削り。口縁部内面及び外面はヨコナデ。	色 : 黄褐色 胎土 : 砂粒を多く含む 焼成 : 不良

器種	番号	出土地点	法量 (cm)	形態について	成形・調整について	備 考
甕	5	5区N	口径 15.9 胴部最大径 16.3	口唇部は上下にわずかに肥厚し、口縁端部には二条の凹線をもつ。口縁部は「く」字状に外反している。胴部は、ゆるやかにカーブし、底部へ至る。	内面頸部下はヘラ削り、口縁部内面及び外面はヨコナデ、口縁部下には櫛歯状工具による押し引きが施されている。	色 : 黄褐色 胎土 : 砂粒を含む 焼成 : やや不良
	6	5区S-2	口径 17.3 胴部最大径 16.5	口唇部は上下にわずかに肥厚し、口縁端部には二条の凹線をもつ。口縁部は「く」字状に外反し、胴部はほとんど広がらず底部に至る。	内面頸部下はヘラ削り口縁部内外面はヨコナデ。 他は磨滅のため不明。	色 : 褐色ないし、茶褐色 胎土 : 砂粒多く含む 焼成 : 不良
	7	5区S-3	口径 17.5	口唇部は上下にわずかに肥厚し、口縁端部には二条の凹線をもつ。口縁部は「く」字状に外反している。	内面頸部下は調整不明であるが、口縁部内面はヨコ方向のハケ目後ナデ。 外面はヨコナデが施されている。	色 : 外面 : 茶褐色 内面 : 赤褐色 胎土 : 砂粒を含むが良好 焼成 : 良好
	8	9区E	口径 18.5	口唇部は上下に肥厚し、口縁端部には、二条の凹線をもつ。口縁部の開きは少なく、胴部最大径も器の下半にあることが予想される。	内面頸部下はヨコ方向のヘラ削り、口縁部内面及び外面はハケ目後ナデ。 頸部下には櫛歯状工具による押し引きが施されている。	色 : 外面 : 淡茶褐色 内面 : 淡褐色 胎土 : 砂粒を多量に含む 焼成 : ほぼ良好
	9	11区W	口径 18.5	口唇部は上下に肥厚し、口縁端部には二条の凹線をもつ。	内外面ともヨコナデ。	色 : 淡赤褐色 胎土 : 砂粒を含むが良好 焼成 : 良好

器種	番号	出土地点	法量 (cm)	形態について	成形・調整について	備 考
甕	10	4 区 S	口径 19	口唇部は上方にわずかに肥厚し、口縁端部には二条の凹線をもつ。	内面頸部下はヘラ削り後ナデ。 他はヨコナデ。	色：外面：茶褐色 部 砂粒を含む 着 内面：褐色 口縁にスス付着 胎土：砂粒を含む 焼成：やや不良
	11	5 区 N	口径 20.4	口唇部は上下にわずかに肥厚し、口縁端部には二条の凹線をもつ。口縁部は「く」字状に外反し、頸部では明瞭に屈曲し、ゆるやかにカーブして胴部に至る。	内外面ともナデ調整が施されていると考えられるが、内面頸部下については、ヘラ削り後ナデと考えられる。 肩部には上下2段に同一方向を向いてヘラ状工具による。 「ノ」字状の刻みが施されている。	色：外面：赤褐色 内面：赤褐色 胎土：砂粒多く含む 焼成：不良
	12	5 区 S-2	口径 18.7	口唇部は下方にわずかに肥厚し、口縁端部には三条の凹線をもつ。	磨滅が著しい調整は不明。	色：淡赤褐色 胎土：砂粒を含む 焼成：やや不良
	13	6 区 E	口径 12.2	口唇部は上下に肥厚し、口縁端部には三条の凹線をもつ。 口縁部は「く」字状に外反している。	内面頸部下はヘラ削り、他はヨコナデ。 肩部には櫛歯状工具による押し引きが施されている。	色：暗褐色 胎土：砂粒を少量含む 焼成：不良 口縁端部にスス付着
	14	7 区 E	口径 18.8	口唇部は上下に肥厚し、口縁端部には三条の凹線をもつ。 口縁部は「く」字状に外反している。	内面頸部下はヘラ削り、他はヨコナデ。 肩部には5本歯の櫛歯状工具による押し引きが施されている。	色：外面：茶褐色 内面：赤褐色 胎土：砂粒を多く含む 焼成：不良 外面頸部下にスス付着

器種	番号	出土地点	法量 (cm)	形態について	成形・調整について	備 考
甕	15	第2号土壙	口径 11.7 胴部最大径 15.6	口唇部は上下にわずかに肥厚し、口縁端部には、二条の凹線をもつ。 口縁部は「く」字状に外反し、ゆるやかなカーブをもって底部に至る。	内面頸部下はヘラ削り後ナデ。 口縁部内外面はナデ 肩部以下は、ハケ目がみられる。また肩部には櫛歯状工具による押し引きが施されている。	色：外面：暗茶褐色 内面：赤褐色 胎土：砂粒をかなり多く含む 焼成：やや不良 外面全体にスス付着
	16	5区N	口径 20.9	口唇部は上下に肥厚し、口縁端部には二条の凹線をもつ。また、口縁部は「く」字状に外反し、端部は、ほぼ直立する／	内面頸部下はヘラ削り後ヨコナデ。他はヨコナデ。	色：赤褐色 胎土：砂粒を少量含むが良好 焼成：やや良好 外面胴部ぶスス付着
	17	5区E	口径 12.4	口縁部は「く」字状に外反し、口唇部は直立す、口唇部中央は、わずかにくぼみ口縁を一巡する。	内外面ともヨコナデ。	色：淡赤褐色 胎土：砂粒を多く含む 焼成：不良
	18	5区N	口径 16.7	口縁部の開きは少なく、口唇部は下方にわずかに肥厚し、端部には三条の凹線をもつ。また端部はほぼ直立する。	内外面ともヨコナデ。 頸部にヘラによる刻みがわずかに残存する。	色：黄褐色 胎土：砂粒を含む 焼成：不良
	19	5区E	口径 14.9	口縁部は「く」字状に外反し、口縁端部は、わずかに肥厚する。 胴部最大径は口径より小さい。	内面頸部下にヘラ削り、他はヨコナデ。	色：黄褐色 胎土：砂粒を多く含む 焼成：やや不良
	20	5区N	口径 16.9	口縁部は「く」字状に外反し、胴部に比して著しく肉厚である。口縁端部は丸く納めている。	内面頸部下はヘラ削り後ナデ、他はヨコナデ。	色：赤褐色 胎土：砂粒を多く含む 焼成：良好

器種	番号	出土地点	法量 (cm)	形態について	成形・調整について	備 考
甕	21	5 区N	口径 14.6	口縁部は「く」字状に外反し，端部はわずかに肥厚する。	内外面ともナデ。外面頸部下にヘラによる刻みが施されている。	色：外面：赤褐色 内面：褐色 胎土：砂粒を含む 焼成：やや不良 外面口縁部以下にスス付着
	22	5 区S-3	口径 13.3	口縁部は「く」字状に外反し，端部はわずかに肥厚し，胴部はあまり膨らまない。	内面頸部下はヘラ削り，他はヨコナデ。肩部には櫛歯状工具による押し引きが施されている。	色：淡黄褐色 胎土：大粒の砂粒を多く含む 焼成：不良
	23	5 区S-2	口径 18.9	口縁部の開きは少なく，端部は下方に向けてわずかに肥厚する。胴部径は口径よりも小さいことが予想される。	内面頸部下はヘラ削り，他はナデと思われる。	色：黄褐色 胎土：砂粒を多く含む 焼成：不良
	24	9 区E	口径 17.3	口縁部は「く」字に外反し，端部は上下にわずかに肥厚する。胴部は大きく張るように見えるが，甕に分類した。	内面頸部下はヘラ削り，他はナデ。肩部にはヘラによる刻みがみられる。	色：茶褐色 胎土：大粒の砂粒を多く含む 焼成：良好
	25	11区E	口径 12.2	口縁部は小さく，開きは少ない。胴部の張りは少ない。口縁端部はわずかに肥厚する。	内面頸部下はヘラ削り，他はナデ。頸部直下には，ヘラによる刻み目がみられる。	色：淡茶褐色 胎土：砂粒を含む 焼成：不良 外面全体にスス付着
	26	11区E	口径 12.2	口縁部は「く」字状に外反し，均等な厚みをもって端部に至る。また口縁は短い。	内面頸部下はヘラ削り，他はナデ。頸部直下にはヘラによる刻み目があり，その直下には一条の凹線をもつ。	色：淡赤褐色 胎土：砂粒を多く含む 焼成：不良

器種	番号	出土地点	法量 (cm)	形態について	成形・調整について	備 考
甕	27	6 区 E	口径 12.6	口縁部は「く」字に外反し、端部はわずかに肥厚する。胴部の張りは小さい。	内面頸部下はヘラ削り、口縁部内外面はナデ。頸部以下はタテ方向にハケ目。頸部下には、櫛歯状工具による押し引きが施されている。	色：外面：灰褐色 内面：茶褐色 胎土：良好 焼成：やや不良 外面に部分的
	28	11区 E	口径 12.5	器壁は全体に薄い。口縁部は「く」字に外反し、端部はわずかに肥厚する。	内面頸部下はヘラ削り、他はナデ。	色：淡赤褐色 胎土：砂粒を多く含む 焼成：やや不良 口縁下部にスス少量付着
	29	11区 E	口径 18.9	口縁部は大きく開き、端部は上方に向かって著しく肥厚する。胴部はほとんど張らず底部に至る。	内面頸部下は磨滅のため調整は不明。他はヨコナデ。頸部下に櫛歯状工具による押し引きが施されている。	色：赤褐色 胎土：砂粒を多く含む 焼成：不良
	30	11区 E	口径 12.6	口縁部は「く」字に外反し、端部はわずかに肥厚する。胴部の張りは比較的大きい。	内面頸部下はヘラ削り、他はヨコナデ。胴部と口縁部との接合痕がみられる。	色：淡赤褐色 胎土：砂粒を多く含む 焼成：不良
	31	7 区 E	口径 11	口縁部は「く」字に外反し、端部は上下にわずかに肥厚する。胴部の張りは比較的大きく、下ぶくれを予想される。	内面頸部下はヘラ削り、口縁部内面下半はヘラナデ。他はヨコナデ。肩部には、ヘラによる刻み目が1～2段巡らされている。	色：赤褐色 胎土：砂粒を多く含む 焼成：やや不良
	32	5 区 S-2	口径 18.3	口縁部はゆるやかに開き、均等な厚みをもって端部に至る。胴部の張りはほとんどない。	内面頸部下はヘラナデ。口縁部内外面はヨコナデ。外面頸部下はタテ方向のハケ目後ナデ。	色：赤褐色 胎土：砂粒は少なく良質 焼成：良好

器種	番号	出土地点	法量 (cm)	形態について	成形・調整について	備 考
甕	33	第2号 住居跡	口径 13 胴部最大径 15.6	口縁部はゆるやかに開き、均等な厚みをもって端部に至る。胴部はほぼ球形を呈す。	内面頸部下はヘラ削り、口縁部内外面は磨滅のため調整は不明、脚部にはヨコ方向のハケ目とナデがみられる。	色 : 赤褐色 胎土 : 細い砂粒を含む 焼成 : 不良
	34	6区E	口径 15.6 胴部最大径 21.0	口縁部の開きは少なく、均等な厚みをもって端部に至る。胴部はゆるやかなカーブをもつ。	内面頸部下はヘラ削り、他はナデ。	色 : 赤褐色 胎土 : 大粒の砂粒を含むが良好 焼成 : 不良
	35	5区E	口径 15.8	口縁部はゆるやかに開き、端部に行くに従って厚みを減じる。胴部の張りは少ない。	内面頸部下はヘラ削り、口縁部内外面はナデ。頸部以下はタテ方向のハケ目後ナデ。	色 : 外面 : 赤褐色 内面 : 茶褐色 胎土 : 砂粒を含む 焼成 : 不良
	36	5区S	口径 15.7	口縁部はゆるやかに開き、端部に行くに従って厚みを減じる。胴部の張りは少ない。	内面頸部下はヘラ削りの後、ヨコナデ。口縁部内外面はヨコナデ。頸部以下はタテ方向のハケ目。	色 : 外面 : 赤褐色 内面 : 淡茶褐色 胎土 : 細かい細粒を多く含むが良好 焼成 : やや良好
	37	5区N	口径 15.4	口縁部の開きは少なく、端部に行くに従って厚みを減じる。胴部の張りは少ない。	内面頸部下はヘラ削り、口縁部内外面はヨコナデ。頸部下は目の粗いハケ目の後ナデ。	色 : 赤褐色 胎土 : 砂粒をやや多く含む 焼成 : やや不良 外面部分的にスス付着
	38	5区N	口径 18.8	口縁部の開きは少なく、端部に行くに従ってやや厚みを減じる。胴部の張りはほとんどない。	内面頸部下はヘラ削り、口縁部内外面はヨコナデ。頸部以下はタテ方向のハケ目。	色 : 赤褐色 胎土 : 砂粒を多く含む 焼成 : 不良 外面頸部の一部にスス付着

器種	番号	出土地点	法量 (cm)	形態について	成形・調整について	備 考
甕	39	7 区 E	口径 17.5	口縁部は「く」字状に外反し、口縁部中ほどはややふくらみ、端部は若干厚みを減少する。 胴部の張りは少ない。	内面の調整は磨滅のため不明。 口縁部内外面及び、頸部以下はヨコナデ。頸部直下に「ノ」字状のヘラによる刻みが施されている。	色 : 淡赤褐色 胎土 : 砂粒を多く含む不良 焼成 : 不良
	40	5 区 N	口径 24	口縁部は「く」字状に外反し、口縁中ほどから下に向って著しく肥厚する。 外観的には玉縁を想起させる。 胴部の張りは少ない。	内面頸部下は削り、口縁部内外面はナデ。頸部以下はハケ目。	色 : 茶褐色 胎土 : 砂粒を多く含む 焼成 : 不良 外面頸部付近にスス付着
	41	5 区 N	口径 17.6	口縁部の開きは少ないが、口縁中ほどから下に向って著しく肥厚する。 外観的には玉縁を想起させる。	内面頸部下はヘラ削り、口縁部内外面はナデ。口縁部中ほどからは横方向のハケ目。	色 : 茶褐色 胎土 : 砂粒を含む 焼成 : 不良
	42	5 区 N	口径 10.8 胴部最大径 10.3	口縁部は小さく、均等な厚さをもって端部に至る。胴部はほとんど張らず、器高も低い。 全体に小型の甕である。	内面頸部下はヘラ削り、他はナデ。	色 : 暗茶褐色 胎土 : 砂粒を少し含む 焼成 : やや不良
	43	5 区 N	口径 10.5 胴部最大径 12.1	口縁部は小さく、開きも少ない。 厚みも均等である。 胴部最大径は頸部直下にある、大きく張っているような外観を示す。 器高は低く、小型の甕である。	内面頸部下はヘラ削り、他はナデ。	色 : 暗茶褐色 胎土 : 砂粒を少し含む 焼成 : やや不良

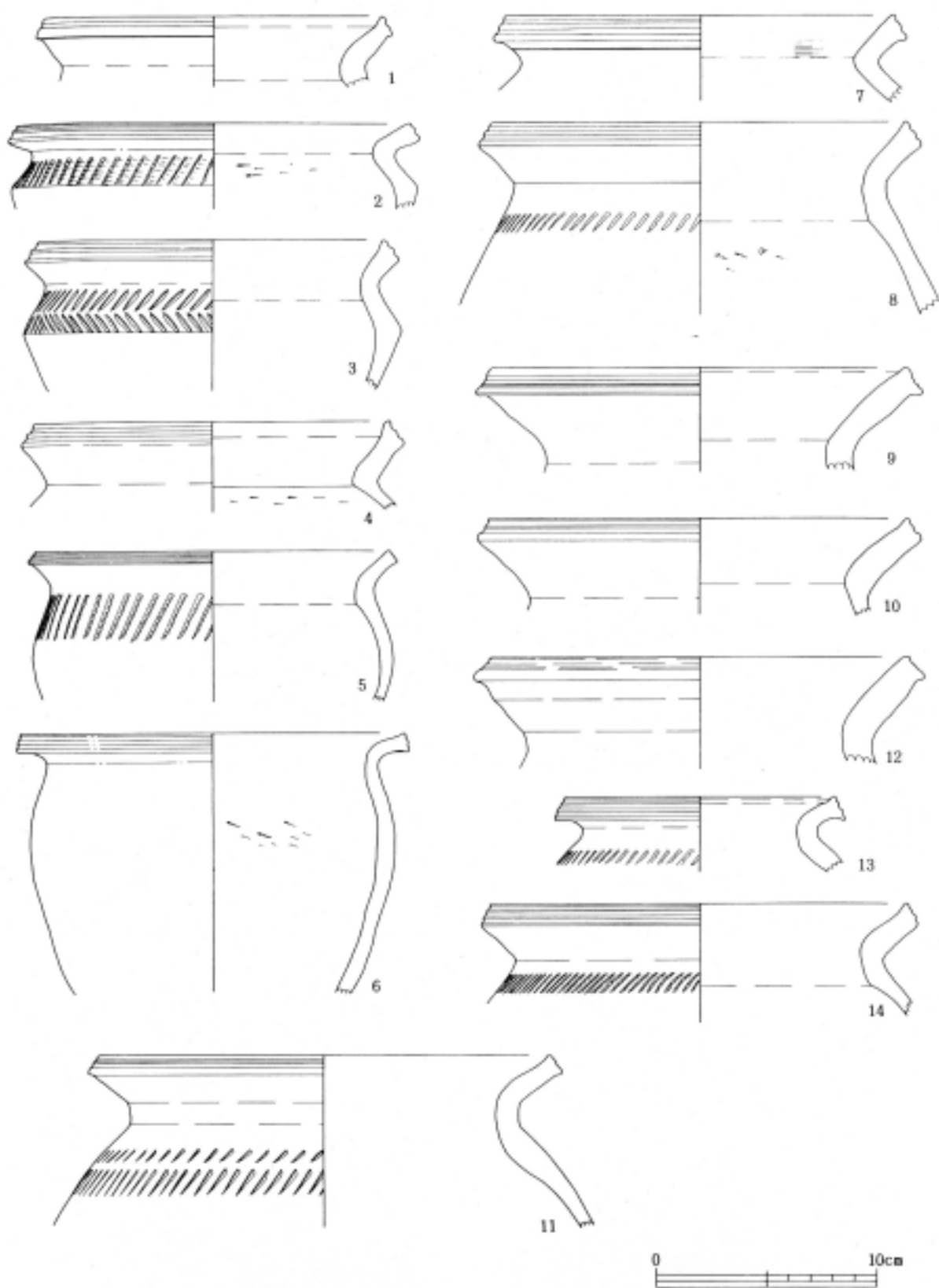
器種	番号	出土地点	法量 (cm)	形態について	成形・調整について	備 考
甕	4	5 区N	口径 10.9 胴部最大径 11.3	口縁部の開きはほとんどなく、直立している観を呈す。口縁端部も直立ぎみで、土器17の口縁と類似する。胴部の張りも少なく、器高も低い小型の甕である。	内面頸部下はヘラ削り、口縁部内外面はヨコナデ。 外面胴部はタテ方向のハケ目。	色：外面：黄褐色 内面：褐色 胎土：砂粒を含むが 良好 焼成：良好
	45	5 区N	不 明	口縁部・胴部とも欠損している。 肩部のカーブから口縁は「く」の字に外反するものと思われる。	内面頸部下はヘラ削りの後ナデ。外面はナデ。 肩部には二段に「ノ」字状のヘラによる刻みが施されている。	色：外面：暗赤褐色 内面：茶褐色 胎土：やや大きい砂粒を含む 焼成：不良
壺	46	5 区N	口径 20.6	口縁部のみの出土である。口縁部は「く」字状に考えられ、その端部で上方に向けて肥厚し、端部には三条の凹線をもつ。	内外面ともナデ。 外面頸部にハケの後ナデが施されているのが、わずかに認められる。	色：淡赤褐色 胎土：砂粒を多く含む 焼成：不良
	47	第2号 住居跡	口径 8.6	いわゆる複合口縁を呈するものであり、口縁部の立ち上りは小さく、内傾する。	内外面ともナデ。	色：外面：赤褐色 内面：淡茶褐色 胎土：砂粒を少量含み良好 焼成：やや良好
	48	6 区E	口径 9.3	複合口縁を呈するもので口縁部の立ち上りも土器47に比べ大きく、約3cmを測り内傾する。	内面及び外面頸部まではナデ。外面頸部下にはタテ方向のヘラ磨きがみられる。 口縁部の立ち上り部には貝殻によるものとみられる刺突文が施されている。	色：赤褐色 胎土：砂粒を少量含む 焼成：良好

器種	番号	出土地点	法量 (cm)	形態について	成形・調整について	備 考
壺	49	第1号 土壌埋土	口径 12.7 器高推定 46.5	複合口縁を呈するもので、口縁部立ち上りも4cmと大きく内傾する。胴部最大径は高い位置にあり腰高の外観を呈するものと考えられる。底部はわずかに凹底を呈する。	内面頸部以下はヘラ削り、口縁部内面下半部はヘラ削りの後ナデ。立上り部内外面から胴上半部にかけてはナデ。胴下半部はヘラナデが施されている。胴下半内面はヘラ削り。口縁立上り部外面には四条の凹線が二段に分けて施され、頸部から肩部にかけては四条の凹線と四本の櫛歯状工具による波状文を単位とする文様が二段描かれている。	色 : 淡赤褐色 胎土 : 砂粒を含むが良好 焼成 : 良好
	50	第2号 住居跡	口径 8.4 胴部最大径 16.3 器高 20.8 底径 7.7 脚部高 3.5	脚付の長頸壺である。口縁部はラップ状に開き、頸部はすぼまる。胴部はそろばん玉状を呈し、胴中央が大きく張り出し稜を持つ。 脚は短かく底径も口径より小さい。 頸部には、胴部と接合する際に補強したと考えられる凸帯がみられる。	口縁部内外面及び頸部はヨコナデ。胴上半部はタテ方向のハケ目が顕著に残る。胴下半部はハケ目の後ナデを施し、丹念にハケ目を消している。脚部内外面はヨコナデ、また脚部には4個の透しがある。	色 : 黄褐色 胎土 : 砂粒をやや含むが良好 焼成 : 良好
	51	5区N	口径 11	長頸壺を呈する口縁のみの出土である。頸部は直立し口縁部はわずかに開く、端部は上下にわずかに肥厚し、二条の凹線をもつ。	内外面ともナデ。頸部下部にタテ方向にハケ目。	色 : 淡黄褐色 胎土 : 砂粒を少量含むが良好 焼成 : 良好

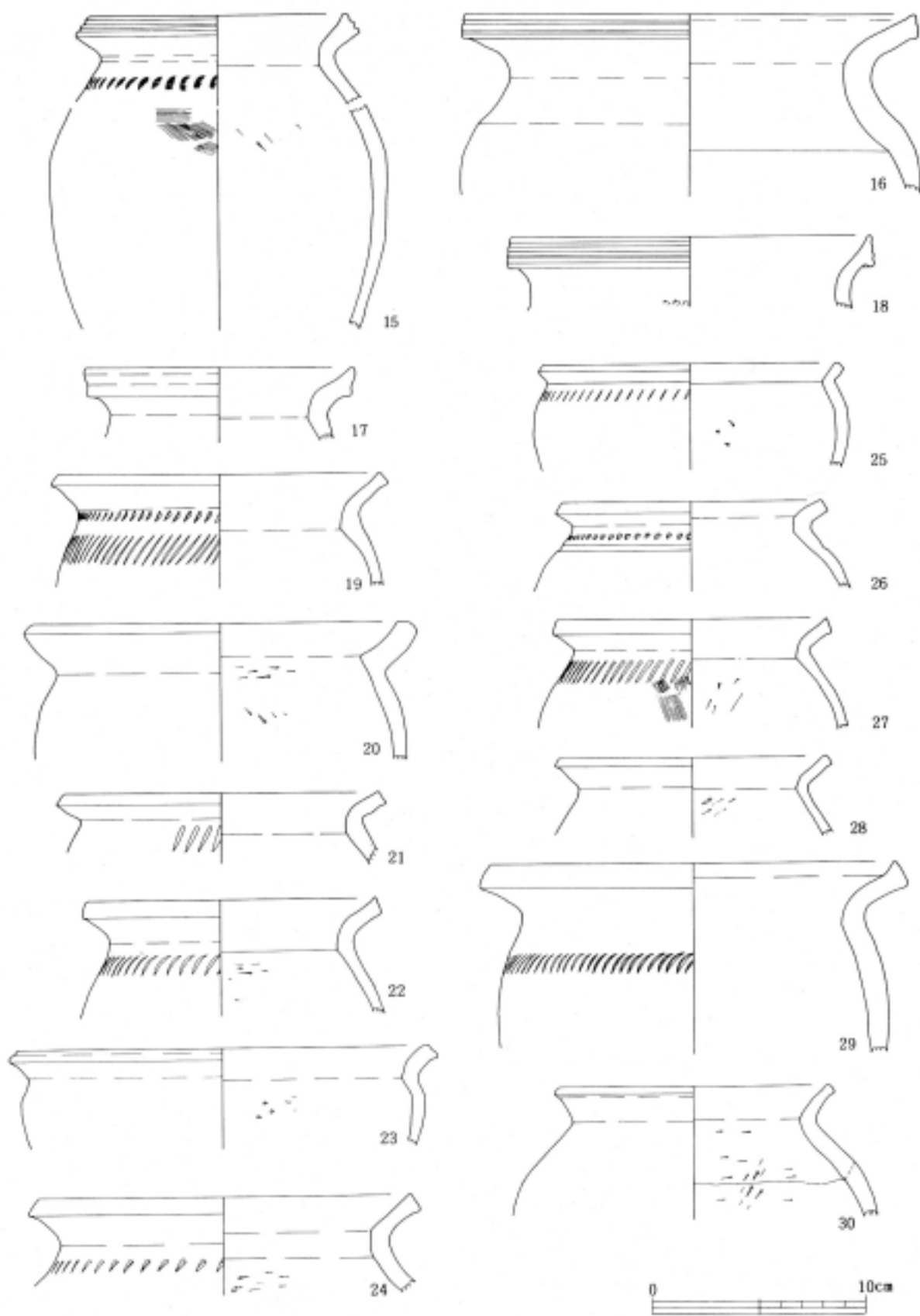
器種	番号	出土地点	法量 (cm)	形態について	成形・調整について	備 考
壺	52	5 区N	口径 13.5	土器51とほぼ同様。	内面にわずかにハケ目が残るが主にナデ。外面は上半部はナデ。下半部はタテ方向のハケ目。	色 : 淡黄褐色 胎土 : やや砂粒を含むが良好 焼成 : 良好
	53	5 区N	不 明	口縁部、胴部以下とも欠失している長頸壺の頸部である。屈曲部には凸帯がある。	内面頸部下はヘラナデ。他はナデ。	色 : 黄褐色 胎土 : 砂粒を多く含む 焼成 : 不良
	54	5 区N	口径 13.5	口縁部は「く」字状に外反し、均等の厚さをもって端部に至る。胴部の張りが大きいことが予想されることから壺とした。	内面頸部下はヘラ削り後ナデ。他はナデ。	色 : 外面 : 赤褐色 内面 : 淡赤褐色 胎土 : 砂粒を多く含む 焼成 : やや不良
	55	4 区S	胴部最大径 21.1	胴部のみの出土である。胴部の張りは大きい。長頸壺となるものであろう。	内面の上半はヘラ削りの後ナデ。下半はヘラ削り。外面はナデ。 頸部直下に現存では三条の凹線を施し、その下部に三条の波状文、次に四条の凹線さらに三条の波状文、そして四条の凹線を施している。	色 : 茶褐色 胎土 : 大粒の砂粒を多く含む 焼成 : 不良
坏	56	5 区N	口径 13.5	坏部上半のみの出土である。 口縁部はやや内傾しながら上方にのび端部は平滑に納めている。	内外面ともナデ。	色 : 黄褐色 胎土 : 砂粒は少なく良好 焼成 : 良好

器種	番号	出土地点	法量 (cm)	形態について	成形・調整について	備 考
坏	57	6 区 E	口径 16.9	坏部上半はほぼ直立し、下半部は大きく内湾している。口縁端部は平滑に納めている。	内外面ともナデ。	色 : 暗茶褐色 胎土 : 大粒の砂粒を含む 焼成 : 不良
	58	5 区 N	口径 16.2	土器59と同様。	内外面ともナデ。	色 : 茶褐色 胎土 : 小砂粒を含む 焼成 : やや不良
	59	5 区 S-2	不 明	坏部と脚部の接合部のみの出土である。	坏部内面及び脚外面はナデ。 脚内面は指による押圧。	色 : 赤褐色 胎土 : 砂粒を含むが良好 焼成 : やや良好
	60	5 区 N	不 明	かなり大型の脚部である。接合は坏部にはめ込んで行ったと考えられる。	坏部内面はナデ、脚部外面上半はヨコ方向のハケ目の後でいねいなナデを施している。脚部内面上半部は指による押圧、下半はナデである。	色 : 暗茶褐色 胎土 : 砂粒は少なく良好 焼成 : 良好
鉢	61	8 区 E	口径 14.8	口縁部は小さく外方へ向って屈曲する。端部は平たく、胴部は張りがない。	内面頸部下はヘラ削り、他はナデ。 頸部直下には「ノ」字状のヘラによる刻み目が施されている。	色 : 茶褐色 胎土 : やや大粒の砂粒を含む 焼成 : やや良好
	62	5 区 N	口径 25	口縁部は大きく外側に屈曲し、胴部に比して器壁は厚く、端部は平滑に納めている。	内面胴下半はヘラ削り、外面胴下半は斜のハケ目。他はナデ。	色 : 茶褐色 胎土 : 砂粒を多く含む 焼成 : 不良 口縁下部と胴下半にスス付着
	62	5 区 E	口径 21.3	口縁部は外側に向けてゆるやかに開き、胴部に向ってほぼ直線的に下る。口縁端部はわずかに肥厚する。	内面頸部下はヘラ削り、他はナデ。	色 : 茶褐色 胎土 : 砂粒を多く含む 焼成 : 不良 口縁下部と胴下半にスス付着

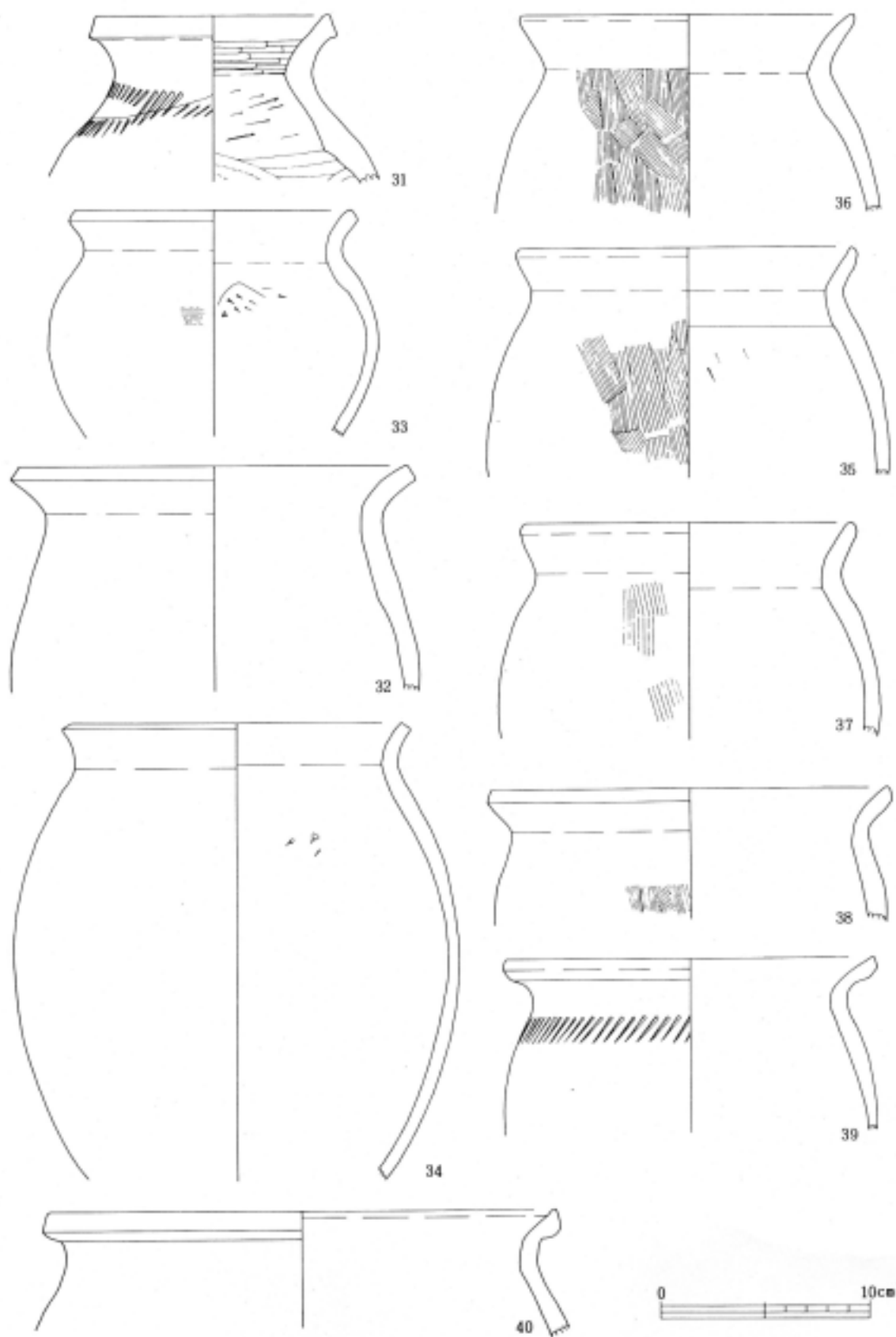
器種	番号	出土地点	法量 (cm)	形態について	成形・調整について	備 考
そ の 他	64	1 区 S	口径 6 器高 6	手づくねの土器であり、土塊から口縁部を引っぱり上げ、内側に折り曲げて端部は丸く納めている。	指押さえによって調整。	色 : 茶褐色 胎土：砂粒を多く含む 焼成：やや良好
	65	7 区 E	底径 9.2	底部は平底で、ゆるやかに立ち上り胴部に至る。	内面ヘラ削り後のヨコナデ。外面ナデ。	色 : 赤褐色 胎土：砂粒を含む 焼成：良好
	66	8 区 W	底径 4.8	底部は凹底でわずかに高台様に立ち上り、ゆるやかに胴部に至る。	内外面ともナデ。	色 : 赤褐色 胎土：細い砂粒を多く含む 焼成：不良
	67	4 区 S	底径 8.1	底部は平底で円盤状を呈す。	内外面ともナデ。	色：外面：赤褐色 内面：淡茶褐色 胎土：大粒の砂粒を多く含む 焼成：不良
	68	5 区 N	底径 8.2	底部はわずかに凹底であり、底部から胴部への立ち上りはほぼ直立し、胴部の器壁は薄い。	内外面ともナデ。	色 : 褐色 胎土：大粒の砂粒を多く含む 焼成：不良
	69	第 2 号 住居跡	底径 3.5	底部は凹底で高台状を呈す。	内面はヘラ削り。 外面はナデ。	色 : 暗赤褐色 胎土：砂粒を含むが良好 焼成：やや不良



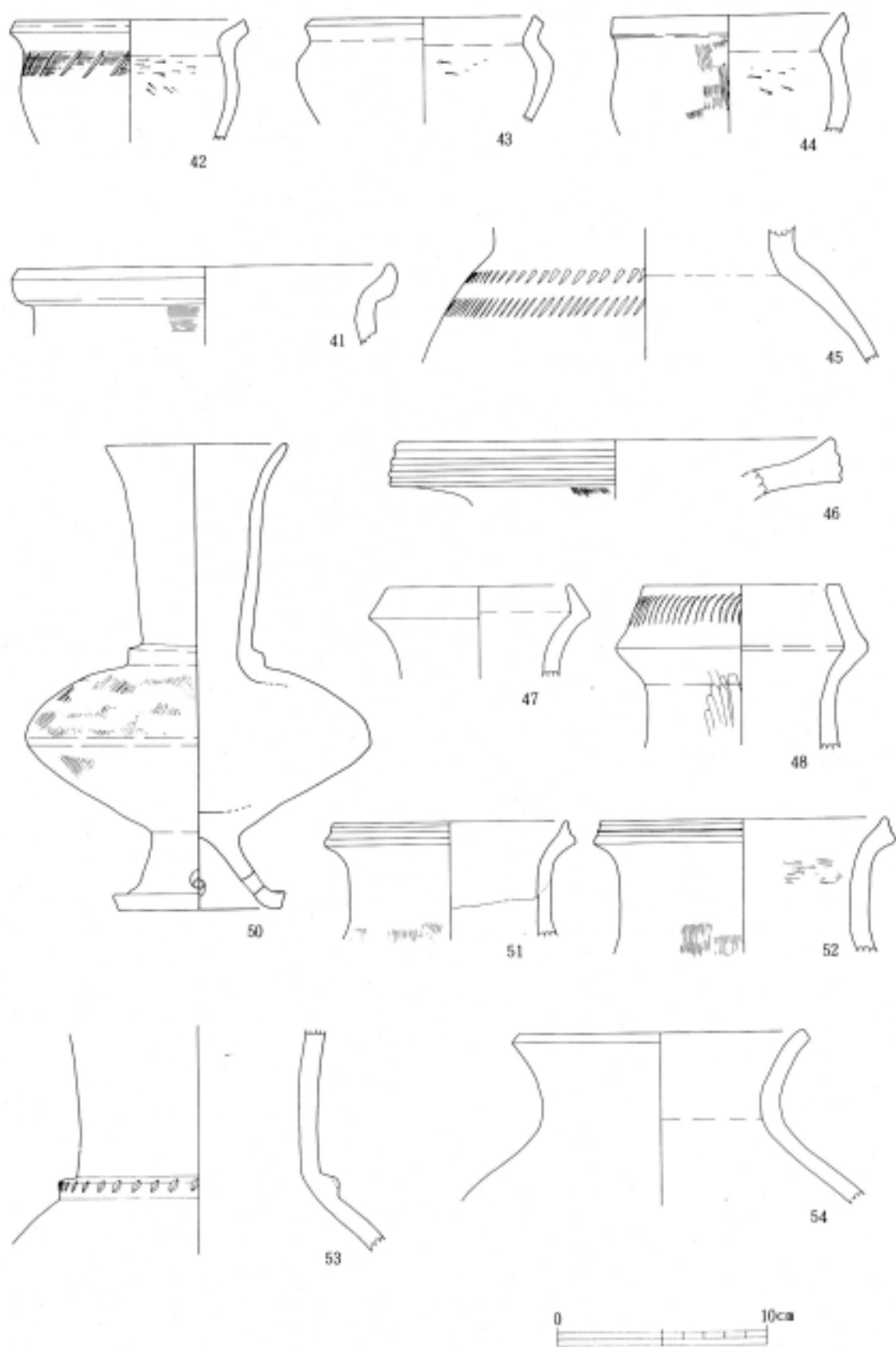
第18図 中哇遺跡出土土器実測図（1）



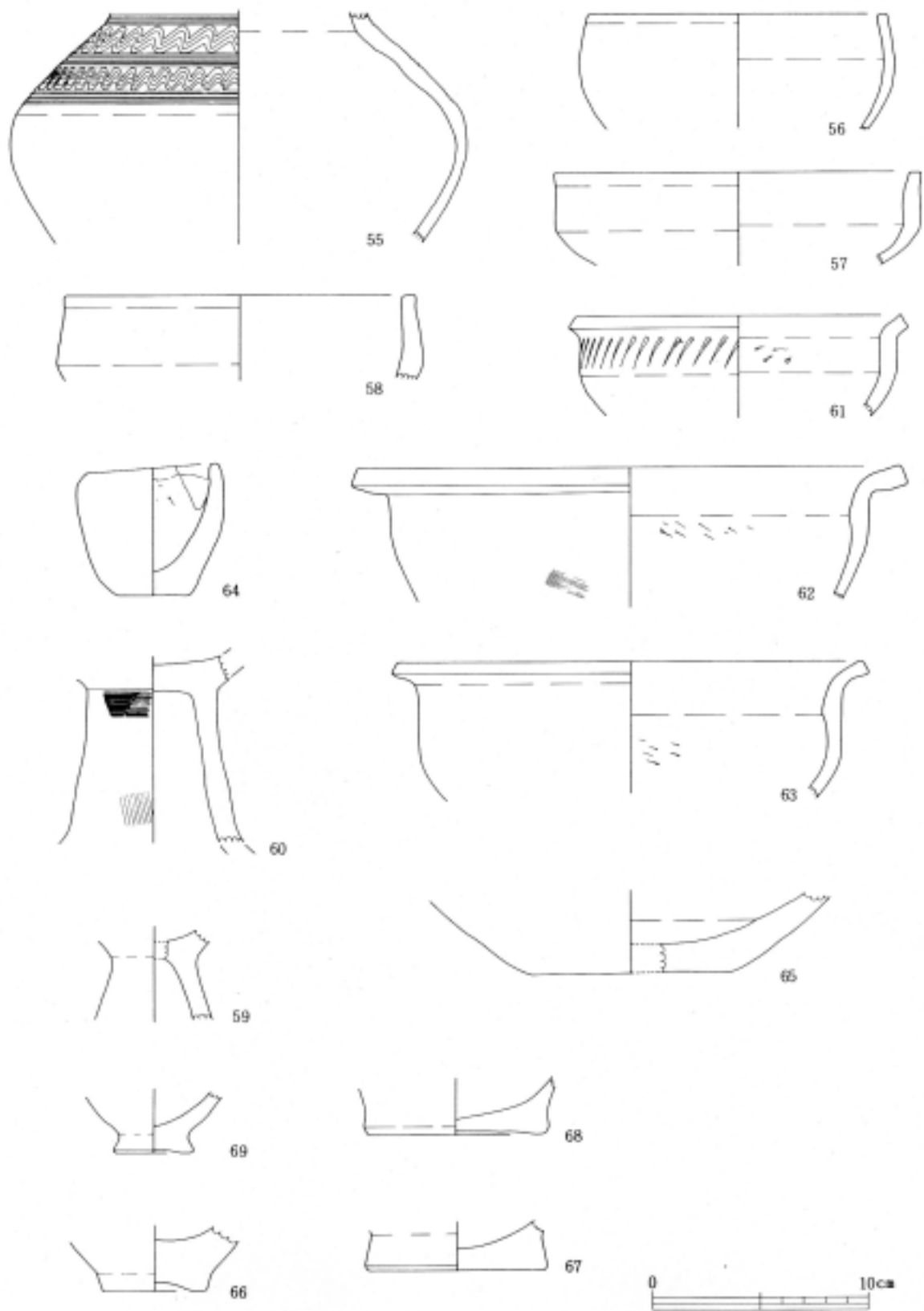
第19図 中畦遺跡出土土器実測図(2)



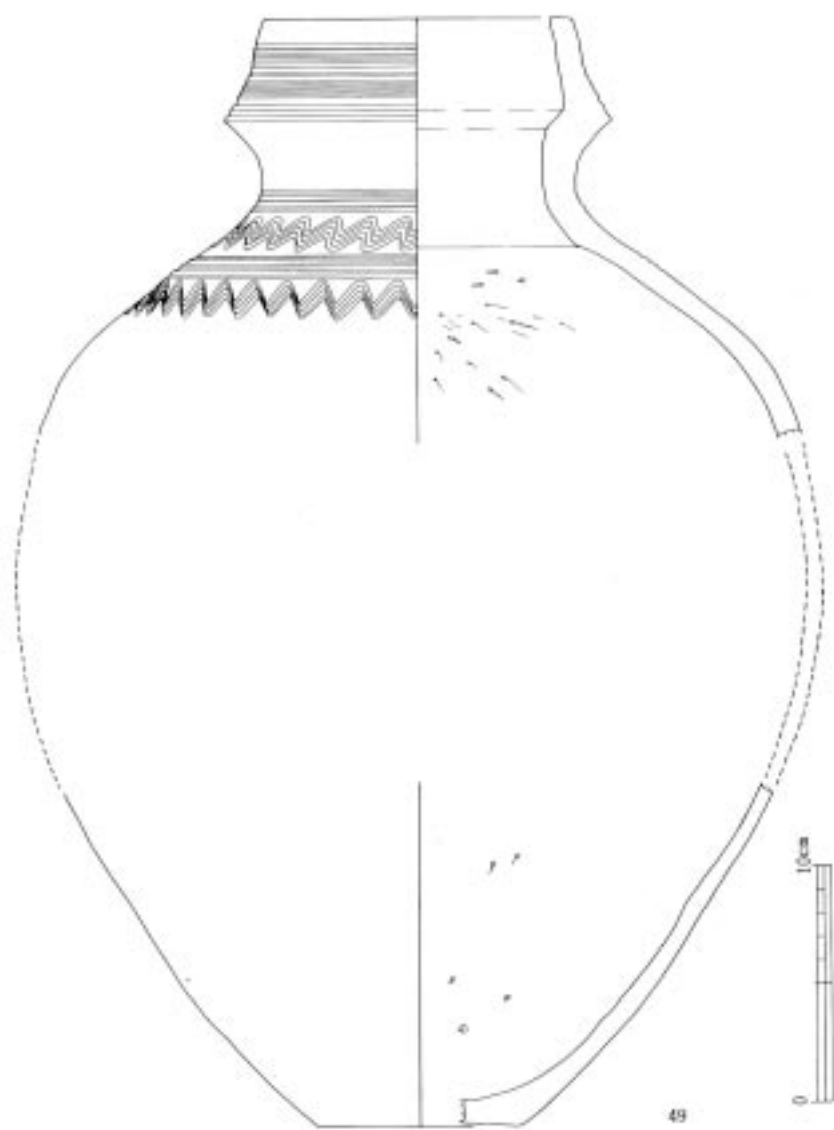
第20図 中畦遺跡出土土器実測図（3）



第21図 中哇遺跡出土土器実測図（4）



第22図 中畦遺跡出土土器実測図（5）



第 23 図 中畦遺跡出土土器実測図（6）

V ま と め

中畦遺跡は、安川を望む丘陵の東及び南向きの緩斜面に位置する遺跡であり、竪穴式住居跡2基、土壇10基が検出された。

住居跡は、東と南の傾斜面から1基ずつ検出されている。東の第1号住居跡は、円形のプランをもつ7本柱のものであり、住居の建て替えの可能性がある。また、その一部に住居焼失の痕跡を残している。南の第2号住居跡は、円形に近いプランをもつものであり、それぞれ10本柱と9本柱からなる住居の建て替えが認められる。

10基の土壇のうち、第1号～第3号土壇の3基は、その位置関係から、第1号住居跡に伴うものと考えられ、とくに第2号土壇は、わずかとはいえ断面は袋状を呈し、土器も出土していることから、貯蔵穴としての用途が想定される。

なお、その他の7基の土壇は、土壇に伴う遺物が出土していないこともあって、その性格は明らかではない。

本遺跡からは、比較的多量の土器が出土しているが、遺構に伴うものは少なく、出土土器から年代を推定できる遺構は、第2号住居跡と第2号土壇だけである。

第2号住居跡から出土している土器のうち、図示し得るのは、甕1点（No.33）、壺2点（No.47、50）、底部のみの土器（No.69）の4点である。

No.33は、甕の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部はゆるやかに開き、器壁は均等な厚みをもって口縁端部に至る。内面の頸部以下にはヘラ削り、外面の胴部には横方向のハケ目がみられる。No.47は、壺の口縁部であり、いわゆる複合口縁を呈するものであるが、口縁の立ち上りは小さく、施文はみられない。No.500は、完形の脚付長頸壺であり、精製のものである。口縁部はラッパ状に開き器壁は口縁端部に行くに従って厚みを減じる。胴部は算盤玉状を呈し、明瞭な稜線をもつ。また、脚部には4個の円形の透しがある。No.69は、底部のみのため器形は不明である。底部は凹底で高台状を呈し、内面にはヘラ削りが認められる。

このうち、No.50の脚付長頸壺を除く3点の土器の特徴から、第2号住居の年代は、弥生時代後期後半に求められよう。

なお、No.50については、広島市周辺では同様の土器の出土例が少ないため、形態的特徴などから、時期を判断することは困難であるが、他の3点の土器と同伴して出土していることから、同時代のものと推定されよう。

第2号土壇からは、口縁部から胴部にかけての甕（No.15）が1点出土している。これは、「く」の字状の口縁をもち、口唇部は上下にわずかに肥厚し、口縁端部には2条の凹線をもつ。また、肩部には、櫛歯状工具による押し引きの施文がみられる。この土器の口縁部及び施文の特徴から、第2号土壇の年代は、弥生時代後期前半に求められよう。

第1号住居跡からは、年代を推定できる遺物は出土していないが、第2号土壇は、既に述べたように第1号住居の貯蔵穴と考えることが妥当であることから、第1号住居は、第2土壇と同時期に営まれたとみることができる。

なお、本遺跡出土の土器の多くは、最高所からの流れ込みの状態出土しており、とくに、最高所から一段低い地点にあるやや平坦な5区Nの調査区に集中している。これらの土器は、太田川下流域における弥生時代後期の土器に共通する特徴をもっている。

次に、本遺跡の性格についてみると、本遺跡は、最高所で標高 164 m 前後、安川の後背地からの比高約 140 m の高所に立地している。また、本遺跡のある尾根は、さらに東へ延びるが、遺跡の東端から 50 ～ 60 m の地点で宅地造成による地形変更を受けている。このため往時の状況は明らかではないが、地形からみて、この尾根はさらに南へ延びていたものと考えられる。

また、この尾根の南側と東側には、安川に流入する小河川がみられ、尾根はこの 2 本の小河川に挟まれるように延びていたものと考えられる。このような立地から考えて、本遺跡南側の同一尾根上に遺跡があったことが推定される。このことは調査例は少ないが、安川流域における他の^(注1)遺跡の^(注2)立地及び本遺跡周辺の分布調査の結果からもうかがえる。

ところが、本遺跡の位置する同一尾根上の東方の地点に、比較的良好な平坦面がみられるにもかかわらず、住居跡などの遺構は検出されていない。このことから、本遺跡は、同一尾根上の南側にあったと予想される遺跡と直接に続くものではなく、やや離れた地点に、いわば孤立した状態で営まれたもののようである。

このような立地にある本遺跡の性格を考えるうえで、住居跡からの出土遺物が注目される。

2 基の住居跡は、いずれも日常生活が営まれたとみるには、出土遺物がきわめて少量であり、とくに第 1 号住居跡は、貯蔵穴と考えられる 3 基の土壌を伴うにもかかわらず、出土土器は少量の細片のみであった。しかるに、第 1 号住居跡からは小形の定形式ガラスの勾玉^(注3)、第 2 号住居跡からは精製の脚付長頸壺が出土しており、これらは日常生活に用いられたものとは考え難い。

このガラス勾玉及び脚付長頸壺については、最高所の直下から比較的多量の土器片が流れ込みの状態で出土していることが、その用途を示唆するようである。

この最高所の平坦な部分には土壌 4 基が設けられているのみで、土器を常時使用したと考えられる遺構はみられない。このことから、これらの土器は、わざわざ本遺跡最高所まで運び上げられ、廃棄されたと考えざるをえず、通常の土器の廃棄方法から考えて合理性に欠ける。これは、最高所に土器を廃棄するという行為に何らかの意図が働いていることを示すものであろう。

以上のように、本遺跡の性格について若干の考察を行ったが、今回の調査ではそれを明らかにするだけの資料は得られておらず、今後、類例の増加を待って再検討したい。

(注 1) 恵木遺跡、国重遺跡など

恵木遺跡発掘調査団「恵木遺跡発掘調査報告」1982

広島市教育委員会「国重城跡発掘調査報告」1982

(注 2) この尾根の南側を削平して造成したと考えられる高取第 1 団地の南側から土器片が採取されている。

(注 3) 森貞次郎氏の形式分類による。

「弥生勾玉考」「鏡山猛先生古稀記念古文化論攷」1980

圖 版



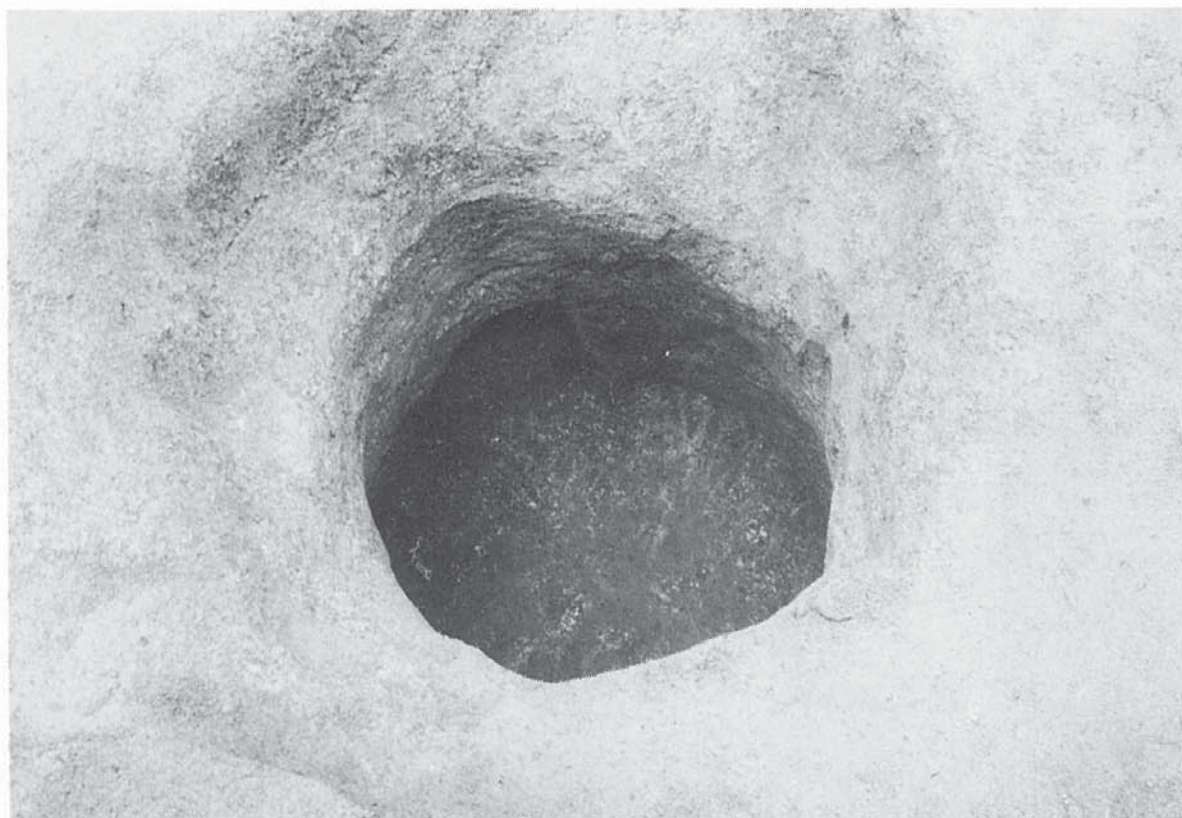
中畦遺跡全景（航空写真）



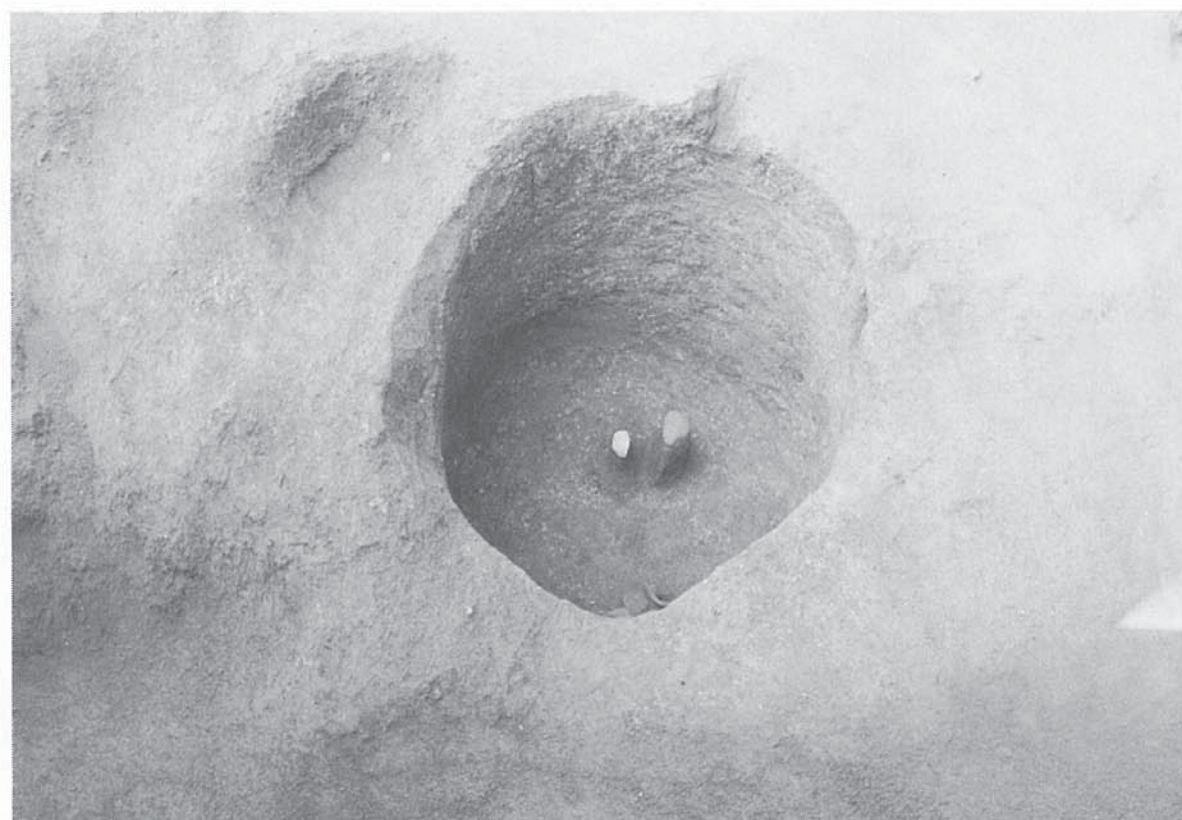
a. 第1号住居跡（南から）



b. 第2号住居跡（西から）



a. 第 1 号土壤



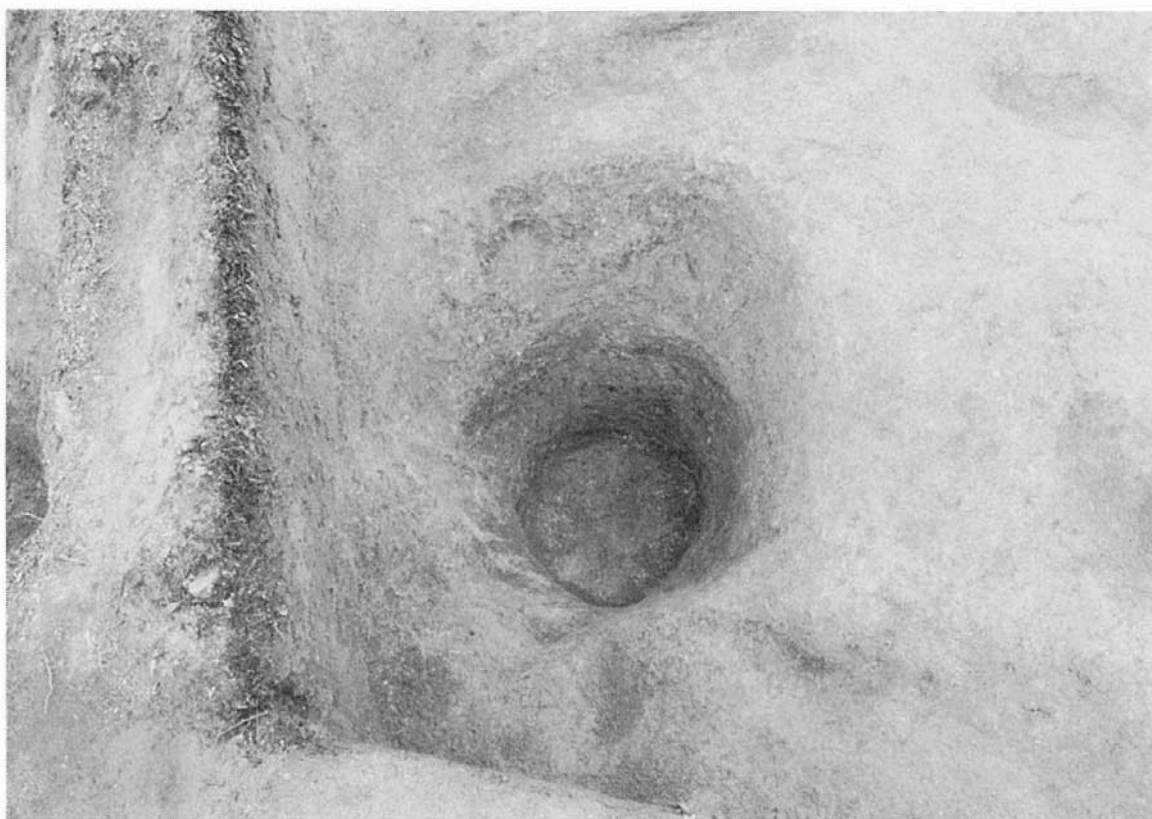
b. 第 2 号土壤



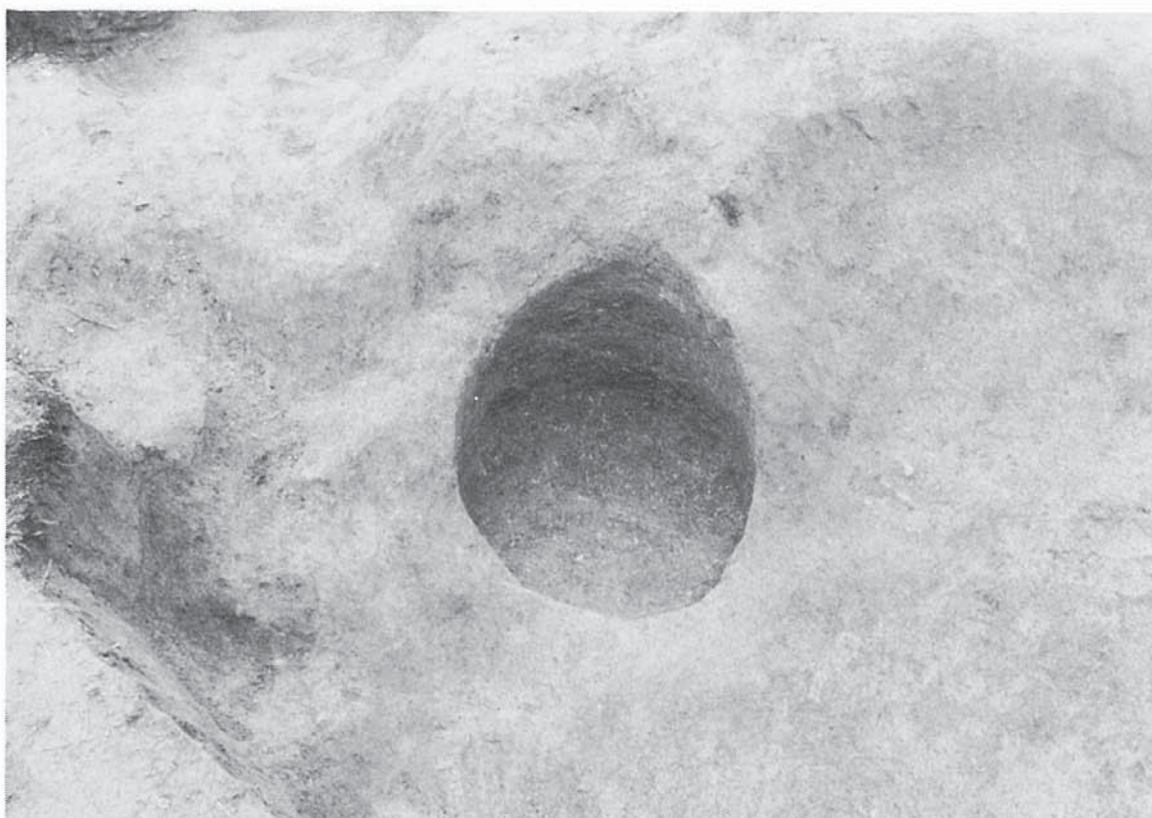
a. 第 3 号 土 壙



b. 第 4 号土壙及び平坦面（北東から）



a. 第 5 号土坑



b. 第 6 号土坑



a. 第7号, 第8号, 第9号土坑(西から)



b. 第10号土坑



a. 最高所直下土器出土状況（5区N南側部分・西から）



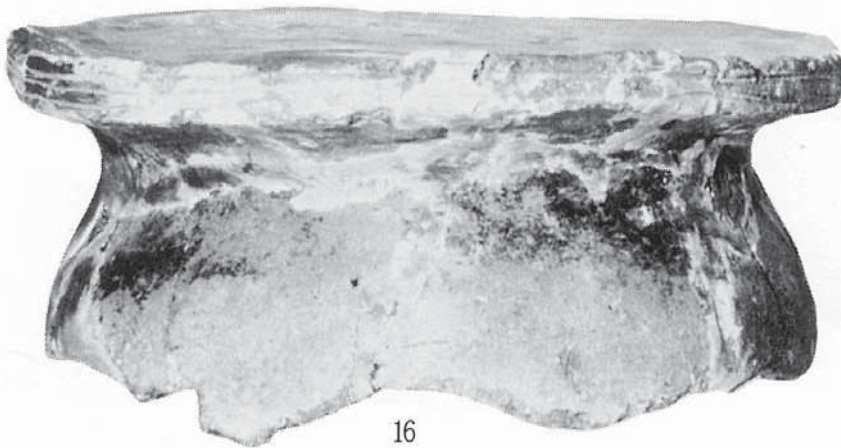
b. 最高所直下土器出土状況（6区E・北から）



50



6



16

中畦遺跡出土遺物(1)



49



48



52



51



67



53



34



7



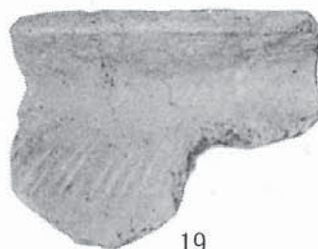
4



41



24



19

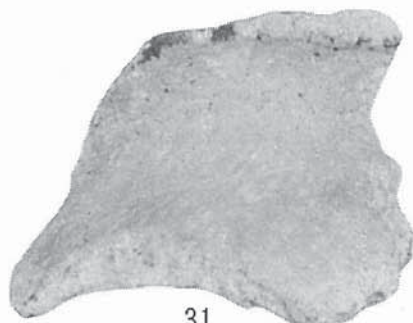


3

中畦遺跡出土遺物(3)



20



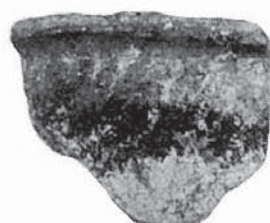
31



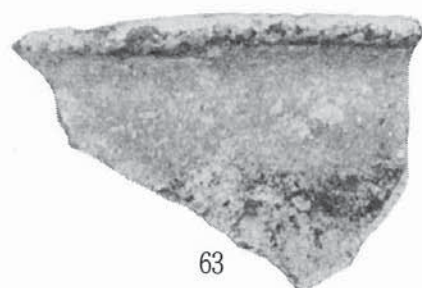
39



5



61



63



62



60



64



鉈

広島市の文化財 第29集

広島市安佐南区安古市町所在

中哇遺跡発掘調査報告

1984年3月

編集行 広島市教育委員会
(社会教育部社会教育課)
広島市中区国泰寺町一丁目4番21号
TEL (082) 245-2111 (代)

印刷所 有限会社 創元社
広島市中区国泰寺町一丁目8番1号
TEL (082) 245-0997 (代)